ほうまさ
方正友好交流の会　会報 24 号　2017 年 5 月刊

星火方正（せいかほうまさ）

～燎原の火は方正（ほうまさ）から～

天皇・皇后両陛下ご来館のそれから	寺沢　秀文
謝恩と慰霊―清明節のハルビンで―	中島　幼八
南京虐殺紀念館を見学して	望月　信隆
ひとり、ぶらりと方正へ	橘賀　秀紀
銘柄米産地慶安県の真剣さ―中国の「米どころ」を訪ねて思う―	佐藤　喜作
優れた師、有難き友　歩平先生の死を悼む（第１回）	石　金楷

宝清県宝清街を高台から見下ろす。宝清県は旧ソ満国境近くにあり、軍事上の拠点でもあった故に、10 以上の開拓団の人々の日本への帰還率は 27%以下と非常に低かったという

なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒龍江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正（ほうまさ）友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と人類愛的な友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

星火方正（第 24 号）～燎原の火は方正から～

目　次

天皇・皇后両陛下ご来館のそれから	寺沢　秀文	1
多摩『招魂公苑』を知っていますか？	〃	9
参考記事	信濃毎日新聞	16
謝恩と慰霊―清明節のハルビンで―	中島　幼八	19
南京虐殺紀念館を見学して	望月　信隆	24
銘柄米産地慶安県の真剣さ―中国の「米どころ」を訪ねて思う―	佐藤　喜作	26
ひとり、ぶらりと方正へ	橋賀 秀紀	30
優れた師、有難き友　歩平先生の死を悼む　（第１回）	石　金楷	34
アフリカには1890年代からエスペランティストがいた！ ―第６回アフリカエスペラント大会に参加して―	田平 正子	36
子どもたちにこそ見せたい知らせたい国「コスタリカ」 ～未来の主権者を創る“平和ノーベル賞”ムーブメントを起こそう！～	千田　優子	39
大平外交哲学と対中国友好精神の復活	凌　星光	42

日中関係「大事なのはひとり一人」　小澤　征爾　45

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

中国残留の91歳　決意の帰郷　大久保　真紀　47

満州からの引き揚げ「父母のおかげで命拾い」　河合 弘之さん　東京新聞　48

『毛沢東の対日戦犯裁判』の書評と「わんりぃ」について　大類　善啓　49

日中文化交流市民サークル誌「わんりぃ」代表、田井 光枝さん　「日本と中国」　50

版画家　澤岡 泰子さん　中国人学生に木のリトグラフの魅力を伝える　〃　51

「僕の使命は戦争の狂気を伝えること」　しんぶん　赤旗　52
―満州から引き揚げた、なかにし礼さん―

北朝鮮・残留日本人女性の訴え「父母の墓参りしたい」　東京新聞　53

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

タンゴ歌手・藤沢嵐子と大連　大類　善啓　54
―≪大連体験≫を決して口にしなかった嵐子に思う―

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

≪旅のご案内≫　方正日本人公墓建立を許可した周恩来の足跡を訪ねて　60

方正友好交流の会」へのお誘い　61

報告と編集後記　62

天皇・皇后両陛下ご来館後のそれから

満蒙開拓平和記念館
副館長・専務理事　寺沢秀文

１．始めに

昨年１１月１７日、天皇・皇后両陛下の「強いご希望」により、長野県阿智村にある我が満蒙開拓平和記念館にご来館頂いたのは、我々記念館関係者にとっても大変な驚きであった。それから約半年が過ぎ、今回、方正友好交流の会の大類事務局長から「両陛下ご来館後の記念館の様子等の後日談について一文を寄せて欲しい」とのご要請を頂き、敢えて筆を執った次第である。

両陛下のご来館の経過、その時のご様子等については当誌の前号にても報告等させて頂いた通りであるも、両陛下のご来館は我々自身としても全く意外なことであった。両陛下が満蒙開拓についてご関心をお持ちであることは以前からお聞きしていたことではあるも、と言って我が記念館にまでお越し頂けるようなことはまずしばらくの間は無いだろうと勝手に思っていた節がある。

それは、如何に両陛下におかれて満蒙開拓に関するご関心がおありになっても、まだ開館から３年程度しか経っていない、ましてや民間運営の、こんな小さな記念館に両陛下にお越し頂けるなどとは思ってもいなかった。勿論、満蒙開拓の史実を伝えることの意義の重要性は我々自身としても十分に自覚しているところであり、だからこそ全国どこにも無かった満蒙開拓に特化した記念館を、それも民間主導で、足かけ８年もかけて実現させたのはその重要性を痛感していたからこそでもある。

しかし、その過程で、この満蒙開拓というテーマがその史実内容等からして、いわば「不都合な史実」として多くの人々からタブー視され、長い間触れられてこなかったという戦後の長い歴史を改めて痛感し、如何に両陛下が満蒙開拓に深いご関心を持たれたとしても、またその満蒙開拓に特化した全国で唯一の記念館であったとしても、両陛下がそこに訪問されることは各方面等よりかなりの抵抗、障壁等があるだろうと思っていたからである。

満蒙開拓という「不都合な史実」を伝えようとする記念館があるという自体もまた一部の人々にとっては「不都合な事実、不都合な存在」であり、ましてやそこにこともあろうに両陛下がご訪問されるということは、「不都合な史実」である満蒙開拓という歴史に再び光を当てることになり、その「不都合な史実」を伝えようと言う記念館が存在するという「不都合な事実」が国内に広く知らしめることになり、それもまた「不都合な事態」であり、そういった状況等を慮るに、両陛下がこの記念館を訪問されるということは極めて実現困難なことであろうと当方自身にしても勝手に思っていたことではある。

しかし、平成28年11月17日、両陛下は当記念館の玄関先にお立ちになった。「まさか」という奇跡が起きたのである。それだけ「満蒙開拓平和記念館を訪問したい」と言う両陛

下のご希望が、お強かったということでもあり、改めて両陛下のご来館に対し深く感謝と敬意を表し上げる次第である。

言うまでもなく今回のご訪問を含む当地方への行幸啓は「私的なご旅行」としてであった。しかし、私的なご旅行ではあっても両陛下が当記念館にご来館されたという事実は何ら変わらず、また今回の私的な旅行の主たる目的が満蒙開拓平和記念館への訪問であったということを考えると、前述通りの様々な思惑等、関係各訪問等への影響等を考えると公的なご訪問としては難しいものがあり、やはり「私的なご旅行」の範疇とせざるを得なかったものと思う。しかし、繰り返しにはなるも、両陛下にご来館賜ったという事実の意義の深さ自体はなんら薄れるものではないことは言うまでもないところである。

２．両陛下ご来館の意義と来館者数の増加

さて、前置きが長くなってしまったが、両陛下にご来館頂いたことによるその後の影響、それは何と言っても満蒙開拓に対する国民の関心が今までよりも高まり、またその史実を伝えようとする満蒙開拓平和記念館という施設が存在するということ自体をこれまでよりも多くの人々に知って頂くことが出来たということに尽きる。ただ、後述通り、全国的にはまだまだの感はあるも・・・。

昨年10月20日に宮内庁より両陛下の記念館訪問が報道発表されて以来、「満蒙開拓平和記念館というものがあることを初めて知った」という方や、これまで記念館の存在を知ってはいてもまだ行ったことが無いという地元の方などを中心として「両陛下が行かれるという所がどんな所か実際に見てみたかった」という方など、これまでは記念館の存在を知らなかった方や足を運ぶまではしようとはしていなかった人々が記念館に訪れてくれるようになった。これは極めて大きな効果であった。

言うまでもなく来館者数も増えた。後述するも、ご来館以降、対前年同期比で５０％以上の来館者数の増となっている。実を言えば、開館後の１年間で当初予想を大きく上回る年間３万人超の来館者があり、その後も漸減傾向ながら健闘してきた当記念館の来館者数も、３年目を過ぎた昨年５月頃から対前年比での減少が目立つようになり、「いよいよ来るべきものが来たか」と気を引き締めていたところにこの両陛下のご来館であった。因みに平成25年４月に開館以降の３年間の来館者数は初年次30,609人、２年次29,719 人、３年次27,069人と約１割減の健闘であったものが、開館４年目に入った平成28 年５月には対前年同月比49,9％と急激な落ち込みを見せ、以降、対前年同月比を３～４割程度下回るという状態が続いていたところから、正直なところ、両陛下のご来館は正しく「神の救い」であり、これが無かったらどうなっていただろうかと思うとゾッとするところではある。しかしながら、ぶれずに一生懸命やっていれば必ず報われるものなのだと改めて思うところではある。ご来館された11月の来館者数は4,177人にて、前年11月の来館者数3,670人に対し＋18.8％の増であったものの、冬季になるとグッと落ち込む毎年の傾向の中で、この冬は12～２月まで対前年同月比＋50％以上で推移しているのはやはりご来館による効果であることは言うまでもない。因みに、仮集計ではあるも、ご来館の昨年11月17日から今年３

月31日までの間の来場者数は8,325人となっており、前年の同期間が5,463人であるところから前年同期比＋52.4％の増加となっている。来館者数が増えれば、民間運営にて入館料収入だけを頼りの当記念館だけに大いに経営安定に寄与するところであるし、それ以前に、何よりも、「より多くの人に満蒙開拓という史実があったことを知って頂く」という当記念館の設立目的を果たすためには、記念館にまだまだより多くの人に足を運んで頂かなくてはならない。その意味でも両陛下のご来館の効果は大きなものがあったし、またそれは両陛下の意図されるところでもあったと思う。

３．両陛下ご来館の「思い」とは

今改めて思うに、満蒙開拓平和記念館というまだ出来て３年余りの小さな民間運営の記念館に両陛下がわざわざ「強いご希望」によりここを訪問されようとしたこと、それは満蒙開拓というこれまでタブー視されてきた史実に改めて国民にももう一度向き合ってもらいたい、そしてその犠牲者等を慰霊すると共に、二度と悲しい犠牲者を出さないようにしなければならないという強い思いからであり、そしてその史実を伝えようとする民間運営の小さな記念館を少しでも応援してあげようという有り難いお気持ちもあってのことであろうと畏れ多いながら勝手に御推察申し上げているところである。

そして、このご訪問は、単に両陛下が一個人として「満蒙開拓についてもう少し詳しく知りたい」という思いからだけではなく、天皇・皇后両陛下がある場所に行かれるということは広く国民の耳目を集めるということをご承知の上で敢えて「強いご希望」により記念館をご訪問頂いたのであると思う。

当日、両陛下の館内のご案内役を務めさせた頂いた当方も改めて驚いたことであるも、両陛下の満蒙開拓に対するご関心の強さ、知識の深さは相当のものであった。方正友好交流の会の大類事務局長からお聞きするに、両陛下はかなり以前にあの羽田澄子監督作品のドキュメンタリー映画『嗚呼、満蒙開拓団』もご覧になっておられるとのことでもあった。

その両陛下は、申し上げるまでもなく、かつての戦争の傷跡に向き合い、海外の戦跡地等にも訪問、慰霊の旅を続けられ、国民の痛み等を分かち合おうとされている。今回の満蒙開拓平和記念館への訪問もその一環としてのものであられたと思う。これは当方の勝手な推測ではあるも、きっと両陛下は多くの犠牲を出した旧満州の地にも慰霊の旅に行かれたいというお思いがおありになるのだろうと思う。

しかしながら、現在の情勢下ではそれは極めて困難なことである。ならばせめて、全国で最も多くの満蒙開拓団を送出した長野県南部の飯田・下伊那地方を訪ね、そこに建つ全国で唯一の満蒙開拓に特化した記念館である「満蒙開拓平和記念館」を訪ねることにより現地での慰霊に代えると共に、元開拓団員らに当時の労苦に対する慰労の言葉をかけたいと思われ、そして満蒙開拓平和記念館をも応援し元気付けてあげようというお気持ちからのご来訪であったのだろうと勝手に推察申し上げているところである。

勿論、中国側では侵略と受け止め、旧満州国は「偽満」として国家などとしては全く認めていない中国側における「満蒙開拓」の受け止め方や、あるいは畏れ多いながら天皇制

の論議、更には天皇の戦争責任等の様々な論議、意見、考え方等もある中で、両陛下が当記念館をご来館されるということの様々な受け止め方、影響、波紋等についても我々は慎重に受け止めているところである。

当時の戦略上の理由等はあろうとも、結果として「関東軍は我々開拓団を置き去り」にしたと受け止めている人の多い開拓団関係者等にとって、「関東軍」に対する反感は強く、そして「関東軍」は「天皇の軍隊」でもあったという受け止め方等から、必ずしも両陛下のご来館に対して歓迎的な立場ではない方もいるということも我々は配慮したところでもある。また、前述通り、満蒙開拓の舞台となった中国現地の人々の満蒙開拓に対する受け止め方に対する配慮等についても、我々は記念館構想当初から心を配ってきたところでもある。そのような満蒙開拓に関わる複雑な歴史背景等もあり、両陛下の行幸啓時には見慣れた風景である日の丸の旗を振ってのご歓迎も、宮内庁側のご配慮等もあって記念館周辺では日の丸は配布等されなかったのも、このような細かい配慮の上にであった。しかし、沿道の人々の温かく熱心なご歓迎の様子があったことは言うまでもない。

４．両陛下ご来館後の来館者層の変化等

両陛下のご来館による記念館へのその後への影響としては、言うまでもなく前述の来館者数の増加等は大きいものがあるも、何よりも地域の人々を中心として満蒙開拓に対する見方が変わり、そして満蒙開拓平和記念館に対する評価等が更に高まったということも間違いのないところである。

これまでは記念館が出来たことは知ってはいても、余り関心は無かったり、「そんなに楽しいところでもなさそう」等々と足が遠のいていた人々も、「天皇陛下まで行かれたんだったら、自分たちも一度は行ってみなくてはいけない」といった気持ちで来館された方も少なくない。中には、家族の車に乗せてもらって来館されたあるご老人のように、「前から来たかったのだが、なかなか若い人たちに連れていってくれとは言いにくかった。でも、天皇陛下がお見えになったことで、私も連れていって欲しいと言ったら家族みんなで一緒に来てくれた」と言うような方もあったのは本当に嬉しい限りである。

このように来館の動機は様々であるも、どのような理由でも良いのでまずは記念館に足を運んで頂き、そして満蒙開拓という史実があったことを知ることから全ては始まると思っている。勿論、「こんな程度のものか」等の受け止めをされる方も中にはいる。しかし、全ての人に同じように理解してもらうこと自体は望んではいない。訪れた人の中から何人かでも、この史実を真摯に受け止め、明日の平和に向けての教訓を学び取ってくれる方がそのうちの一部でもいれば、当記念館の目的の多くは果たせるというものである。

しかしながら、両陛下のご来館により様々な層の人、いろいろな考え方の方も訪れるようになった。中には、両陛下も来られた場所ということで訪問はされたものの、「満蒙開拓は侵略などではない」、「満州国は正当な国家で、現地の発展に大きく寄与した」等の意見を残される方もある。そういったことを言われる方は少なくはあるも、それでも以前よりは少しながら増えたのも事実である。しかし、満蒙開拓の「被害」と「加害」の両面

を伝えようとし、また当時の為政者や軍部関係者等にとっては「不都合な史実」であると受け止められることも少なくない「満蒙開拓」というテーマに改めて光を当てようという当記念館の存在を「自虐史観」的な施設としてやや批判的に受け止めていた人々等にとっても、両陛下がそこをご来館されたということは、満蒙開拓という史実を見つめ、語り継ぐということのいわば「正当性」「重要性」についてのお墨付きを頂いたものとも言えよう。そういった方面等からの批判等を受けることはこれまでもほとんど無かったものの、今後は更にないだろうと思うところでもある。

５．地域における今回のご来館の受け止め方等

今回の両陛下のご来館により、苦労を重ねてこられた元満蒙開拓団員等の関係者の皆さんの労苦が少しは報われたという受け止め方をして頂ける方も多いと共に、また建設構想当初、「そんな無駄なものを作っても人などきっと来ない」と否定的な見方も少なくなかった満蒙開拓平和記念館の建設構想を当初段階から支援し、支えてきて下さった皆さんにとっても大きな朗報であり、「両陛下まで来て下さって、やっぱり我々がやろうとしてきたことは正しかったんだ」と思って頂けることとなった、その点においても誠に有り難い今回の両陛下のご来館でもあった。

当初はこの地域の中核都市である飯田市内での建設用地の確保を目指したものの、地元行政等が慎重等であったため、それが果たせず、そのような時に、「ならばこの村の中でやったらどうか」と、今の記念館の敷地を無償で貸与してくれる等の多大な支援をして頂いてきた阿智村を始めとする地域の皆さんからのご支援に対して、少しはご恩返しが出来たものと思っている次第である。

今上天皇陛下が、この飯田・下伊那地方に行幸啓されたのは少なくとも明治以降では初めてのことである。天皇が皇太子時代の昭和40年代にこの飯田・下伊那地方を訪問されたことが一度だけあるも、それはそれよりも少し前にこの地域でも多くの犠牲者を出した昭和36年の未曾有の大水害、いわゆる「三六災」の慰問とその復興の視察のためにであったと言う。畏れ多いながら、今回の「私的なご旅行」も満蒙開拓平和記念館への訪問という目的が無かったら、たぶんは大きな災害等のお見舞い等無き限り今後もなかったものと思われる。

このことを知る多くの皆さんは「満蒙開拓平和記念館が出来たからこそ両陛下にこの地域に明治以降初めて行幸啓頂くことが出来た。本当に記念館のお陰」とおっしゃって頂ける方も少なくない。しかし、そうではない方も実際には多いようである。両陛下が天竜峡に立ち寄られたり、戦後の飯田大火の復興の象徴でもある飯田市内の「りんご並木」を訪問されたことばかりを強調し、実は今回の訪問が満蒙開拓平和記念館への訪問があってこそということに目を向けようとする方は比較的少ない。そのことを内心では知ってはいても、そのことを正面から受け止めようとはしたくないという心理も一部にはあるものと思われる。

建設構想当初を含め、余りその建設には前向きではなく慎重であった地元行政の一部等

を含め、自分たちが評価しなかったものが今高い評価を受けていることを良しとはしないという思いもあってのことと思う。

しかし、そうではあっても、やはり地元の教育界等に対しては、なぜ両陛下が今回、飯田・下伊那地方を訪問されたのか、それは満蒙開拓平和記念館を訪ねることを主目的としてであり、ではその満蒙開拓とはどのようなことであったのか、そしてこの地域と満蒙開拓とはどのような関係があるのか、実はこの地域が全国で一番多くの開拓団を送出した地域であり、それだからこそ、全国で唯一の満蒙開拓平和記念館がこの地に出来ており、だからこそ両陛下がこの地を訪れてこられたのだということを、満蒙開拓の史実と共に子供達にしっかりと教えて頂きたいものと地元教育界に対しては切に願うところである。

６．メディアにおける今回のご来館の取り上げ方等についての思い

とは言え、「信濃毎日新聞」や「南信州」などの地元紙は、両陛下の満蒙開拓平和記念館へのご訪問の経過やその意義等も含めて詳細に取り上げて頂いたところであり、少なくともこの地元メディア等を通じて長野県内では両陛下の記念館訪問のことは広範に知らされたことは誠に有り難いことであった。

その一方で、今回の両陛下の記念館ご来館は県外のメディア等では余り取り上げられなかったということもまた事実であり、満蒙開拓の史実を語り継ぐことの困難さを思うところであった。このご来館のことは全国紙等でもその取り上げはかなり小さかったし、高いニュース発信力を誇るＮＨＫにおいても、長野県内のローカルニュースではかなり取り上げられたものの、全国ニュースとしては当日の午後２時台に短いニュースとして流されただけであった。

また取り上げ方の小さかった全国紙等の多くは、その記事内容も「飯田市内のりんご並木等を訪問された」こと等を中心に取り上げ、中には記事の末尾に「満蒙開拓平和記念館も訪問された」と一行のみ載せただけの全国紙もあった。このことを思うとき、如何に両陛下が訪問されたとは言え、満蒙開拓平和記念館を訪問されたということのニュースバリュー自体が小さなものと受け止められており、また当記念館の存在もまだまだ知名度が低いことの証とも思う。と同時に、これは穿った見方となるかも知れないも、冒頭に触れた「不都合な存在」、すなわち、満蒙開拓という不都合な史実を伝える記念館があるという「不都合な事実」、そしてそこを両陛下が訪問されたということを余り知られたくないという「不都合な出来事」という受け止めた方をする力がどこかで動いているのであろうかという思いを抱いてしまうほどの、全国紙等での余りに不自然な小さな取り上げ方であったと思わざるを得ないところである。とは言え、両陛下にご来館賜ったという事実自体は何ら変わることではない。そして、満蒙開拓を語り継ぐということはこういった不可解なこと、不条理なこと、理不尽なこと等に対する挑戦の連続でもある。

７．記念館への無理解に対する切ない思い

不条理なことは他にもある。たまにでもあるも、「天皇陛下が来られて、記念館も来館

者が増えて、儲かって堪まらんだろう」という心ないことを冗談交じりに言われる向きもある。そういった向きには笑ってやり過ごすことにしているも、時には切ない思いに駆られる時もある。これは当方が直接聞いたことではないも、ある所で「満蒙開拓平和記念館は多くの犠牲者を出した満蒙開拓を商売にして儲けている」と言われたそうである。これには当方も本当に悲しくなった。こういったことを言っている人々は、この記念館が税金で運営されている施設ではなく、入館料だけでやっていかなくてはならない民間運営の施設であるということを多分、知ってはいないのだろう。

記念館の売上が上がったところで、我々記念館の役員や職員の給与等が歩合制で増える等のわけでもない。言うまでもなく、我々役員は記念館構想時から今まで、ずーっと無報酬のボランティアであり、職員・パートの皆さんにも本当に薄給の中で一生懸命にやって頂いている。そして、多くのボランティアの皆さんのご支援のお陰で運営されているということを、是非そういった心ないことを言う人々にも知って頂きたいものである。そんなにまでして、無償活動等として、どうしてこの記念館を維持し、満蒙開拓の史実を語り継いでいこうとするのか。それは、満蒙開拓という史実があったことをより多くの人々に知って頂くことを通じて、二度と悲しい犠牲者を出すようなことの無きよう、未来の平和に向けての教訓として頂きたいからこそである。

満蒙開拓は「決して忘れてはならない歴史」であると共に、「決して二度と繰り返してはならない歴史」でもある。しかし、だからと言って満蒙開拓に関わった人々の人生そのものを否定したり、批判したりするものなどではない。そういった多くの皆さんの犠牲やご苦労があったからこそ、今の日本の平和があり、繁栄があるのだということも決して忘れることなく語り継ぎ、同時に、二度と悲しい犠牲者を出すような歴史を繰り返すことの無きよう、この歴史を教訓として活かしていくことこそ、多くの犠牲者に対する鎮魂であり、慰霊であると思うからこそである。そして、二度と繰り返してはいけない歴史ではあるも、その歴史を決して忘れることなく語り継ぐことで、あの地で無念の思いで亡くなっていった多くの人々の思い、あるいは我が長兄のように僅か１歳で「生きる」ということの意味さえ知らずして厳寒の避難民収容所の片隅で命を落としていったような人々の死を無駄にしないことなのだと思うのである。

８．天皇陛下の新年のお歌

今年の元旦、天皇陛下は５首の御製のお歌を詠われた。その中には昨年の記念館への来訪のことを取り上げたものがあった。

＜満蒙開拓平和記念館にて＞

「戦の終りし後（のち）の難（かた）き日々を面（おも）おだやかに開拓者語る」　（天皇陛下御詠歌）

言うまでもなく、記念館来館時に館内で行われた元開拓団員の皆さんとの懇談の中で、団員の皆さんらが終戦後においても受け続けた様々な苦難等を淡々と語られたことをお聞きになったことを受けてのお歌であり、満蒙開拓団の受難の数々に思いを馳せて頂いての

ものである。天皇陛下は昨年暮れの12月23日の83歳のお誕生日の会見の中でも「阿智村の満蒙開拓平和記念館を訪問しました」と触れられている等、ご来館以降もこうして記念館のことについて触れ続けて頂いていることは誠に有り難い限りである。その有り難いお気持ちにもお応え申し上げるべく、我々もこれからもしっかりと励んで行かなくてはならないものと改めて思うところである。

なお、記念館では両陛下のご来館があったことを有り難くは受け止めるも、しかしそれを余りこちらで大々的に取り上げて記念館の宣伝等に使おうとすることは極力控えたいものとの思いから、各地にあるような行幸啓記念碑等の建立等は当面は考えていないところであった。しかしながら、既に、両陛下が記念館訪問後に立ち寄られた飯田市内のりんご並木では両陛下お立ち寄りの記念碑が建てられ、また両陛下がお泊まりになった昼神温泉の宿泊旅館でも独自に記念碑を直後に建てている。「今回どうして両陛下がこの地にお見えになられたのか本当に良く判っているのかなあ」と思っていたところ、長野県や地元の阿智村等から、「せっかくのことなのだから記念碑を建てたらどうか」というご提案があったところから、前述の今年元旦の天皇陛下御製のお歌を記念した記念歌碑として記念館敷地内に建立しようということとなって、今夏の建立に向けてようやく準備を始めたところである。

９．終わりに

今回、両陛下にご来館頂いたことは、私事ながら館内のご来館を務めさせて頂いたことも含めて、満蒙開拓平和記念館の言い出しっぺとして関わり続けてきた当方自身にとっても大変大きな出来事であった。口の悪い仲間たちなどは「ここまで来ればお前も『双六』で言えばもう『上がり』だな」と言う輩もいる。しかし、大変畏れ多いことではあるも、満蒙開拓平和記念館は両陛下に来て頂くことを最終目的として建てようとした訳でもない。あくまでより多くの人々に満蒙開拓という史実を知ってもらいたいという思いからに尽きる。そのことからすれば、まだまだ記念館は始まったばかり、「道半ば」である。

両陛下によるご来館の効果もそうはいつまでも続く訳ではない。もうすぐ開館丸４年を過ぎるも、やがてはまた来館者が減る時期が必ず来る。しかし、来館者の多寡に一喜一憂することなく、例え来館者数が少なくとも、ぶれることなく、満蒙開拓という史実、伝えるべきことを伝え続けていく、その記念館の役目をこれからも果たし続けたいと改めて思うところである。皆様よりの益々のご支援と重ねてのご来館を願う次第である。

（てらさわ・ひでふみ：1953年生まれ。不動産鑑定士の傍ら、元開拓団跡地等を訪ね歩き、両親が暮らした吉林省水曲柳など20数回訪れる。満蒙開拓平和記念館創設に奔走した。当会には発足時から理事として携わる）

多摩『拓魂公苑』を知っていますか？

満蒙開拓平和記念館
副館長・専務理事　寺沢秀文

１．始めに

去る４月９日、多摩市連光寺３丁目にある「拓魂公苑」にて今年も恒例の合同慰霊祭が行われた。この「拓魂公苑」については以前に当誌上でも触れたことがあったかも知れないも、改めて、全国規模では唯一の満蒙開拓の慰霊公園であるこの「拓魂公苑」について触れさせて頂きたいと思う。

この「拓魂公苑」での合同慰霊祭は主催者がいなくなった今も有志の皆さんの手により毎年４月の第２日曜日に開催されており、今年も約150名程度の皆さんが全国各地から集まってこられた。当方も７～８年前から毎年参加させて頂いているが、その頃には300人ぐらいはいたと思われるも、高齢化等もあって年々参加者が減少してきているのは大変残念なところである。

２．「拓魂公苑」の経緯等について

この「拓魂公苑」は東京都多摩市連光寺の「旧聖蹟記念館公園」（「桜ヶ丘公園」とも言う）の入口にあり、その公苑入口付近に立つ案内版には下記の通り記されている。

「この土地（1,621㎡）と満州開拓の歴史を刻んだ拓魂碑などは、社団法人全国拓友協会の厚意により都市計画公園用地及び記念碑等として東京都が寄贈を受けたものです。平成13 年３月。東京都」

この「拓魂公苑」の建設とその後の経過等について概説するに、この公苑の一番奥に建てられている大きな碑にはこの公苑が東京都に寄付されることとなった経過が述べられており、その碑の一番上には「満洲開拓殉難者之碑建設の由来」と題して、一番最初にこの公苑が建設された経過等が下記の通り記されている。

「この碑は、満蒙の旷野に無惨に散った八万の開拓者とその人々を守りつつ、自らも逝った関係者多数の御霊が合祀してあります。昭和七年（一九三二年）はじめられた満洲の開拓事業は、満蒙の天地に、世界に比類なき民族協和の平和的建設と、祖国の防衛という高い日本民族の理想を実現するために、重大国策として、時の政府により行われたものであります。凍土をおこし、黒土を耕し、三十万の開拓農民は、日夜、祖国の運命を想いながら黙々と開拓の鍬を振いました。然し、その理想の達せられんとした昭和二十年の夏、思わざる祖国の敗戦により、血と汗の建設は一瞬にして崩れ去り、八万余の拓士と関係者は、満蒙の夏草の中に露と消えていきました。そして、そこには未だ一輪の花も供えられたことはないのです。ここに同志相図り、水清きこの多摩川の丘に一碑を建てて、祖国と民族のために、雄々しく不屈の開拓を闘い抜き、そして散っていった亡きこれらの人々の御霊をお祀りすると共に、再びかかる悲しみのおこることなき世界の平和の実現を心からお祈りせんとするものです。昭和三十八年八月。建設委員長　安井謙」（句読点以外は原文のまま）

ここに名のある「安井謙」氏は元参議院議長や自治大臣などを歴任された方で、また安井誠一郎東京都知事の実弟に当たり、この建設委員長も当初は安井都知事が務め、後に弟の安井謙氏が建設委員長を引き継がれたのだそうである。この安井謙氏の経歴を見ると元満鉄社員であったとのことであり、このようなところからこの建設委員長を務められたものと推定される。

３．公苑内の様子と慰霊柱設置の経過等について

前記の通り、「拓魂公苑」は昭和38年に満蒙開拓関係者等の手により建設されて維持されてきたものであり、現在、ここには当方が以前に数えた限りでは公苑の正面に向かって左側に92本、右側に79本、計171本の慰霊柱が並んでいる。一般開拓団と共に青少年義勇隊の慰霊柱も多く見受けられるも、満蒙開拓の構成内容等からすると一般開拓団関係の慰霊柱数が少ないところではある。全国的に見た一般開拓団と青少年義勇軍との構成比は約７対３であるも、ざっと見たところではここの慰霊柱のたぶん半分程度は青少年義勇軍関係である。また、全国規模としては唯一の満蒙開拓に関する慰霊公園でありながら、この171本という数はやや少ないのも事実である。全国から渡満した開拓団の総数は凡そ８００団以上と言われており、その２割程度にしかならない。また、全国で最も送出数の多かった我が長野県からの開拓団の慰霊柱を探してみると、一般開拓団は「第５次黒台信濃村」、「第六次長野村」、「高社郷開拓団」など数本、また義勇隊関係も数本しか見当たらないところである。

当方がここの建設当時のことに詳しい方からお聞きしたところでは、この公苑を昭和38年に設置した時、全国の開拓団や義勇隊にそれぞれの慰霊柱の募集をしたところ、希望があったのはこれだけであったと言う。当時、確か慰霊柱１基当り10万円の協賛金が必要だったそうで、それも希望が少なかった一因となったとも聞いている。

また、以下は当方の推測ではあるも、戦後どうにか満州から引き揚げ日本の土を踏んだ開拓団関係者の多くは、帰る場所等も無く、戦後新たに開拓された山間辺地の開拓地等に再入植したり、あるいは都会に出て慣れない仕事に就く等の苦難の道を歩いた方も少なくなくなかった。かくしてしばらくの間は経済的にも厳しい生活状態が続いている方が大半だったこと等もあって、昭和三十八年の建設当時としてはここに慰霊柱を建てるだけの経済的余裕等もなかなか無かったのだろうと思われる。また、全国各地の戦後の開拓団組織等においてもそれぞれの地元等で自前の慰霊碑等をその後に建設してもいる。

以前に当方が長野県南信地区の満蒙開拓関係の慰霊碑３０本近くを踏査した結果としても、それらの建立時期はようやくいくらか生活が安定してきた昭和40年代になってから以降が大半で、昭和50年代に入ってからのもの、またそれ以降のものも少なくない。

因みに、長野県内の満蒙開拓引揚者等により組織されていた長野県開拓自興会(既に解散)により長野市の善光寺裏山の雲上殿に建てられた「拓魂碑」は昭和49年12月の建立である。また当方の両親らのいた水曲柳開拓団の慰霊碑が飯田市の郊外に建てられたのは平成６年３月になってからのことであった。また慰霊碑ではないも、長野県開拓自興会の手による大著として研究者等からも高い評価を受ける『長野県満洲開拓史』（全３巻）が刊行されたのも昭和59年３月のことである。

このような戦後の状況等を背景として、「拓魂公苑」には約170基の慰霊柱が並ぶところ

となったが、いずれにしても全国規模としては唯一の満蒙開拓に関わる慰霊公園であることは間違いのないところである。

４．公苑内正面の「拓魂碑」とその揮毫者について

ところで、この「拓魂公苑」の一番奥の正面に「拓魂」と書かれた記念碑が置かれている。そして、その碑の裏側に回りその揮毫者名を見るとそこには「加藤完治」とある。言うまでもなく、満蒙開拓の生みの親の一人と言われ、また満蒙開拓青少年義勇軍の生みの親でもあるあの加藤完治氏である。

加藤完治氏は戦後、しばらくの間は福島県白河市の隣の西郷村の開拓地に入り、その後、再び、満蒙開拓青少年義勇軍とも繋がりの深い日本国民高等学校という学校の校長となり、昭和42年に82歳で天寿を全うしている。そして、この加藤完治氏については満蒙開拓関係者等の中でも評価が大きく分かれてもいる。

一方では、加藤氏を「優れた教育者、農業思想者」等として神格化し今も心服している立場の方もいれば、逆に、多くの犠牲者を出したにもかかわらず戦後一度としてそのことに対しての反省等の弁も無く、多くの青少年が犠牲となった旧満州の地にも一度として慰霊に行ったことも無いこと等から、加藤氏のことを真っ向から否定する立場の方とに分かれている。

青少年義勇軍に関してはこれに特化した資料館がかつてその訓練所のあった内原（現在は水戸市内原）にあるも、そこに行くことを良しとせず、当方らの記念館が「我々の最後の場所」として通ってきてくれている元義勇隊員の中には、多くの若者、仲間達を死地に追いやったのに一度として反省の弁も無かったという加藤氏に対して憤りを顕わにする人も少なくないところである。

青少年義勇軍関係者のみならず、一般開拓団関係者の中においてもやはり加藤完治氏に対する反感を持つ方が大半である一方で、当方としても首を傾げることとして、戦後に建てられた満蒙開拓の慰霊碑、記念碑等の中にはこの加藤完治氏に揮毫を頼んでいる例も少なからずあるということである。当地でも、当方の住む松川町の隣の中川村内に建てられている満蒙開拓の慰霊碑の揮毫者は加藤完治氏である。どうして加藤氏に揮毫を依頼したのか当時の関係者等にお聞きしたいところであるも、この中川村の慰霊碑にしてももう村内に開拓関係者がほとんどおらず、その管理も村で行っており、この碑の建立経過等を聞ける関係者はもう誰もいないのが実情である。

この加藤完治氏の例だけでなく、戦後に建てられた満蒙開拓の慰霊碑の揮毫を、当時、満蒙開拓の送出側であった立場の方がされているという例は他にもある。例えば、当方の住む伊那谷にも多い満蒙開拓の慰霊碑のいくつにも長野県知事（当時）であった西沢権一郎氏という方が揮毫をされている。しかし、この西沢氏が戦前は長野県の拓務課長として満蒙開拓団を送り出すことに奔走した行政実務者のトップの一人であったということを知る人は余りない。勿論、揮毫を頼んでいるのは、時の長野県知事という立場に対してであり、その人がかつては満蒙開拓を送り出した側の幹部であったということはほとんど考慮されなかったり、知らなかったのだろうと思われる。しかし、加藤氏の例にしても、この西沢元知事にしても、満蒙開拓団を送り出して多くの犠牲を出したということに対してどのような感慨を持っていたのか、それらの揮毫が贖罪の意識もあってのことなのか、直接

お聞きしてみたかったところではある。ただ、「拓魂公苑」の碑の揮毫も「拓魂」とあるように、満蒙開拓での犠牲者に対する慰霊というよりも、かつての開拓の精神を讃えるという意味合いで「拓魂」としてあるイメージが強く、余り慰霊の趣が余り感じられないような気がするのは当方の考えすぎであろうか。

５．今年の慰霊祭の様子から

さて、今年はちょうど桜も満開の中、例年通りに行われた合同慰霊祭であるも、今年は昨年よりはやや多いと思われる約150人程度が参加、元開拓団員等の皆さんは勿論、その家族の皆さん、子供さん、お孫さん等まで交じってご参加頂いているご家族等もあるのは誠にありがたい限りである。全国各地からの開拓団関係者等も多く見える中で、その中には前夜、長野県安曇野市で「解散大会」を行ったばかりの「嫩訓八洲会」の一行の皆さんのお元気なお顔も見えた。全国各地で高齢化等のために開拓団組織等が解散等していく中で、この「嫩訓八洲会」も例外ではなく、その50年以上にわたる活動の歴史に一旦の終止符を打つところとなった。

この八洲会の皆さんは、かつて旧満州の北安省にあった「嫩江（みんこう）訓練所」と言う満蒙開拓青少年義勇隊の現地訓練所で過ごされた皆さんにより戦後に組織された会の一つであった。この「嫩江訓練所」は旧満州での五大訓練所の一つと称され、多い時には１万人もの訓練生がいたと言う。ここで苦楽と生死を共にした皆さんは戦後も長い間、活発な活動を展開され、中国各地を訪問したり、また満蒙開拓平和記念館にもその建設以前から支援をし続けてきてくれた皆さんである。

その「嫩訓八洲会」も高齢化等により解散を余儀なくされ、最後の解散大会を４月８日に開催することとし、この日の午後には一行揃って記念館を訪ねて頂き、その後、安曇野市に移動して解散大会を挙行されたものであった。その解散式には当方もお招き頂きご挨拶させて頂いたが、本当に長い間、頑張ってきて頂いた皆さんだけに「本当にご苦労さまでした。これからも長生きをし、満蒙開拓の歴史を語り継いでいって下さい」とお願いしたところであった。そして、この八洲会の皆さんは翌日にこぞってこの「拓魂公苑」での慰霊祭に参加して下さっていたわけである。この八洲会を始めとして、本当に熱い思いで取り組む皆さんの参加により、ここでの慰霊祭はこれまで維持されてきたことを改めて思うところである。

かつてはこの公苑の土地所有者であり設置者でもあった全国拓友協会が解散してしまってからは、毎年この４月の第２日曜日に行われていた慰霊祭を実施する主催者団体等もなく、主立った皆さん等での自主運営となっている。例年の通り、午前１１時に中央前に集まって頂き、まず世話人的立場である前述の「嫩訓八洲会」の事務局長である篠原国雄氏（東京都在住）が開会の挨拶、続いてかつて全国拓友協会の副会長も務められていたという「千振開拓団」の元開拓団員である中込敏郎氏（栃木県那須町在住）が先に立たれて、参加者全員で犠牲者への黙祷を捧げた。その後、当方からも昨年１１月の天皇・皇后両陛下のご来館の報告も含めて満蒙開拓平和記念館の近況等についても報告させて頂いた。各地で開拓団関係の組織等が解散等していく中で、唯一残された満蒙開拓に関わる全国的な記念館として、満蒙開拓平和記念館に対する満蒙開拓関係者の皆さん等からの期待も極めて高いところである。

今年もまた多くの人にご参加頂いたが、それでも昨年来ていたあの方が・・・というようにこの１年間で鬼籍に入られてしまった方も少なからずおられた。往事を知る皆さん等からも良くお聞きするお話だが、この公苑が開設されてからしばらくの間はこの慰霊祭も沢山の参加者で、2,000人以上の人が集まり、この公苑内にも入れない人が沢山いたそうである。また、前記通り、当時の都知事が建設委員長を務めていたこと等もあり、慰霊祭には都知事や多摩市長等も参列されたり、全国各県の知事名等にても献花や電報等が届き、それはそうそうたるものであったという。当方の手元にその往事の盛大さを偲ばせる地元紙の記事がある。平成16年６月１日発行の「多摩ニュータウンタイムス」という地元のタウン紙にこの年の「拓魂公苑」での「拓魂祭」のことが取り上げられている。その記事によれば、この年で第42回目の「拓魂祭」とのことであり、この年でも1,000人程度の参加があり、「地元を代表して都議、多摩市長などが『この拓魂の碑や全国開拓団171基の団碑が建つ聖地をこれからも守り続けていく』と挨拶したと書かれている。そういった往事を知る人たちにとっては、主催者すらいない今の現状は残念ではあろうも、それでも集まって来られる人たちがいる間はこの４月第２日曜日にはここに集まってきたいと皆さん口々におっしゃっていた。当方もここに参加し始めてからもう７～８年になるも、いつの間にか、運営側の一員として関わるようになってしまい、当方自身としてもこの４月の第２日曜日の慰霊祭への参加はこれからも年間行事として大切にしていくつもりである。

６．「拓魂公苑」の今後の維持に関わる諸問題

このように、主催団体解散後も有志の皆さんにより開催され続けている「拓魂公苑」での慰霊祭であるも、この「拓魂公苑」に関しては様々な喫緊の課題もある。実はこの公苑、前記通り、土地自体は平成13年にその所有者であった全国拓友協会から東京都に寄付され、その時に同協会自体がいわゆる指定管理者として管理者となっていたようであるも、その協会自体がその後に解散、管理者が今はいないという事態のまま推移してきてしまっているところである。そのような中、今から３年前の平成２６年の初夏の頃のこと、突然、どこでどう調べたのか当方宛てに東京都の公園事務所という、多摩地区の都立公園の建設・維持等を管轄する都の出先機関から電話が飛び込んできた。

どうやら、いろいろと調べた挙げ句に満蒙開拓平和記念館に辿り着き、そこで当方の連絡先を聞き出して連絡してきたとのことで、用件は何とあの「拓魂公苑」の整備のことでご相談したいことがあるとのこと。そのお電話を頂いた担当課長さんのお話によると、「拓魂公苑」の周辺を東京都で整備する計画があり、その一環として、この「拓魂公苑」の整備も行い、土台が歪んできているなど傷みの進んでいる慰霊柱の土台等もこの際修復等したいと思う。ついてはこれを行うについて、一応ここの関係者の承諾等を取りたいが、かつての管理者であった「全国拓友協会」も既に解散し、どこに連絡を取っていいものやらわからず、満蒙開拓つながりということで、我が満蒙開拓平和記念館に連絡してきたというものであった。

当方としてもその土台の痛み具合等については「以前からどうしたものか」と心配していたところであるだけに、「これは願っても無いこと」と、取り敢えずは「是非、整備・修復をお願いしたい」とお願いし、春の慰霊祭に参加してくる開拓団各組織等の主立った方に趣旨をお伝えし、異議の無いことを確認したうえで、改めて都の公園事務所にも「宜

しくお願いします」と連絡を入れた次第であった。

お陰様にて周辺整備に併せて慰霊柱の修復整備等もやって頂き、関係者一同大変ありがたく思った次第であるが、このことを契機として話題に上がってきたのが、「今回のようなことも含め、何らかの事態に連絡先も無いような状態では困る。ついては、その維持管理者の連絡先として満蒙開拓平和記念館がそれを引き受けてもらえないだろうか」という関係者の皆さん等からの提案であった。

その提案について相談を受けた当方としても、持ち帰って記念館の運営委員会でも議題として取り上げたものの、その「拓魂公苑」の維持の重要性は十分に認めつつも、現実問題として「東京では記念館から遠隔地過ぎる」、「今の記念館にはそれまでするだけの余力は無い」という意見と共に、「聞けば『拓魂公苑』はあの加藤完治氏が揮毫していたり等その影響が感じられ、満蒙開拓の被害と加害の両方を取り上げていこうとする当記念館の設立趣旨等とは相容れないものがあるのではないか」等のご意見もあり、この管理問題は先送りとなってそのままになっているところである。

７．全国各地の慰霊碑等の維持について

前記のような慰霊碑等の維持管理問題は「拓魂公苑」だけでなく、実は全国各地で起きつつある問題でもある。戦後、ようやく生活等が安定してきた時期等に、全国各地で各市町村等や元開拓団員らの組織等により満蒙開拓の慰霊碑等が建立された。

建立されてしばらくは毎年のようにそれぞれの場所で関係者等が集まって慰霊祭等を盛大に行ってきたが、元開拓団員らの高齢化等と共に鬼籍に入ったりし、そういった組織等も解散したり自然消滅等したりして、せっかく作った慰霊碑等も維持管理すること自体が困難となってしまい、その管理が不十分となり朽廃化が進む等の状態にある慰霊碑も少なくないところである。

これらの慰霊碑が公園等の公有地や神社、寺院の境内等にある場合には、それぞれの管理者や神社､寺院等が草刈り等してくれるのが大半であるところからまだ救われてもいる。しかし、共同墓地や個人墓地等の中に建てられており、かつ設置者も単独の開拓団組織等の慰霊碑の場合には、その組織の高齢化、解散等により、維持自体がもう困難となっている事例も少なくない。

また、「政教分離」の厳格化等の中で、行政等が慰霊碑等を神社、寺院等の境内に設置したりすることが困難となったり、あるいは慰霊祭等を含め宗教的行事等に行政等が関わることも困難な時代となっており、なかなか行政等による慰霊碑等の直接管理も難しくなっている面も実際に見られるところである。そして、こういった管理に困った満蒙開拓の慰霊碑等について、「どうしたら良いだろうか」という相談が記念館宛て寄せられてきてもいるし、中には「この際、慰霊碑を満蒙開拓平和記念館で引き取ってもらえないだろうか」という申し入れまで来ているところである。

しかしながら、慰霊碑の重要さは良く理解するものの、しかしそれを一つでもお受けしてしまったら、全国各地から「うちの慰霊碑も」と集まってきてしまい、そう広くはない記念館の敷地が「満蒙開拓慰霊碑公苑」になってしまい、それらを受け入れ、管理するような余力は今の記念館にはとても無く、申し訳ないながらそのことについてははっきりとお断りしているのが実情である。

我々が出来る範囲内で支援する中国現地の「方正日本人公墓」については現地の方正県人民政府がこれを維持管理してくれている。誠に有り難いことである。勿論、日本側においても出来る限りの支援等を行っていかなくてはならないも、その一方で日本国内における満蒙開拓の慰霊碑等の維持管理問題も喫緊の課題となっていることを関係者等においても是非とも認識を深めて頂きたいところではある。

そして、これから先は現段階では当方の私的見解、希望としてではあるも、国策により犠牲になった人々の慰霊碑であること等を踏まえ、これらの慰霊碑等の今後の維持管理等については行政等においても何らかの支援策、対応策を図って頂くべく、国や行政等に対しても働きかけをしていかなくてはならないと思っている。前述の「政教分離」等の問題もあろうも、これもまた満蒙開拓から派生する諸問題等の一つとして満蒙開拓平和記念館においても関与していかなくてはならないことであろうと思っている。未認定の残留孤児の問題等も含め、解決していかなくてはならない諸問題等はまだまだ多く残されているところである。

「拓魂公苑」の拓魂碑

「拓魂公苑」慰霊祭

撮影：寺沢秀文

満蒙「記憶は伝えていく」

元義勇軍の人たちの交流組織 解散へ

最後の大会のため集まり、満蒙開拓平和記念館の前で記念写真に納まる会員たち

阿智

かつて満蒙開拓青少年義勇軍として旧満州（中国東北部）に渡った人たちでつくり、全国に会員がいる交流組織「嫩訓八洲会」が、会員の高齢化や会員数の減少で解散することになった。県内出身者を含む会員14人が8日、下伊那郡阿智村の満蒙開拓平和記念館を訪れ、夜は安曇野市で最後の大会を開催。1972（昭和47）年からの活動に区切りを付けた。記念館の寺沢秀文副館長（63）によると、戦後70年余を経て、義勇軍や元開拓団員らの組織が解散するケースが目立つという。

進む高齢化 平和記念館を訪問

同会は「嫩江訓練所」に全国から派遣されて開拓や軍事の訓練を受け、戦後はシベリア強制収容所へ連行されるなど生死を共にし、日本に生還した人たちの集まり。14、15歳の頃に渡満した会員の多くは90歳近くになった。

記念館で旧満州の地図などの展示を見た会員らは、「17歳の時、ソ連の捕虜として訓練所からソ連の国境近くまで、野宿しながら7、8日間かけて歩いたなあ」「俺はここら辺で終戦を迎えたよ」などと、当時を振り返った。

事務局長を務める佐久市出身の篠原国雄さん（88）＝東京＝は43年、県内の東信、中信地方からの少年約250人で編成した「丸山中隊」として満州に渡った。通常は3年間の訓練だが、途中で終戦を迎え、シベリア強制収容所へ連行された。「配給が少なく、常に腹をすかせていた」としみじみ話した。

会はこれまで、定期的に大会を開いたり会報誌を発行したりしてきた。多い時は大会に200人近くが集まったが、徐々に減り、現在の会員は約60人。今後も活動を続けるのは困難と判断した。

篠原さんと同じ中隊に所属していた安曇野市の内田辰男さん（89）は「年々体験者がいなくなる。記念館を中心に、次世代へ満蒙開拓の記憶を伝えられたらいい」と話していた。

信濃毎日新聞　2017年4月11日付

拓魂祭に集まった人たちを前にあいさつする寺沢さん（右）

満蒙開拓犠牲者悼む

東京・多摩　県内関係者ら「拓魂祭」

全国各地から満州（現中国東北部）に渡った満蒙開拓団や青少年義勇軍の犠牲者を祭る東京都多摩市の「拓魂公苑」で9日、年1回の「拓魂祭」があった。敗戦後の混乱で命を落とした人らを慰霊する数々の碑が立ち、長野県を含む全国から約150人の関係者が集まり、雨にぬれた満開の桜の下で黙とうした。

拓魂公苑は1963（昭和38）年、開拓関係者らでつくる「満州開拓殉難者之碑建設委員会」が碑を建立し開設。この碑を囲むように全国172の開拓団や義勇隊の碑が並ぶ。全国拓友協会が毎年慰霊祭を開き、多い時は約2千人が集まったが、同協会は解散。2001年に約1600平方㍍の土地や碑は都に寄贈された。その後も毎年4月第2日曜日に全国から関係者が集まってくる。

現在は下伊那郡阿智村の満蒙開拓平和記念館の寺沢秀文専務理事（63）が、拓魂祭の世話人を務める。寺沢さんは「満蒙開拓は忘れてはいけない歴史。私の兄も1歳で命を落とした。苦労や犠牲を若い世代に語り継がねばならない」とあいさつ。中心となって開催を担ってきた佐久市出身の元義勇隊員、篠原国雄さん（88）＝東京都＝も「体験者は若くても80代後半になり、行事を続けるのは難しくなったが、記念館がさらに発展するよう応援したい」と語った。

記念館のボランティアら5人も訪れた。初めて参加した水曲柳開拓団員だった原千代さん（82）＝下伊那郡豊丘村＝は「慰霊碑を子どもたちに守っていってもらえるようにしたい」と話していた。

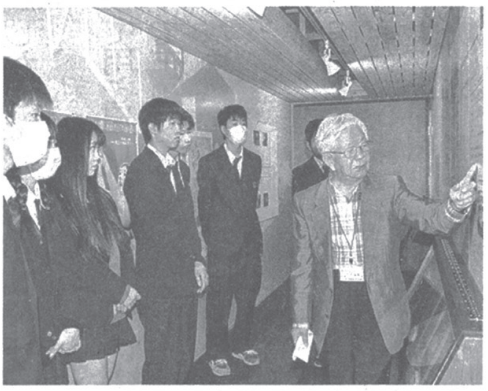
信濃毎日新聞　2017年4月11日付

満蒙開拓の歴史 阿智高生が学ぶ

地元の記念館見学

阿智高校（阿智村）の2年生約100人が10日、阿智村の満蒙開拓平和記念館を訪ねた。10月に修学旅行で広島市の原爆ドームなどを見学する予定で、まずは地元に刻まれた戦争の歴史を勉強する狙い。初めて足を運んだ生徒が多く、ボランティアガイドたちの話に静かに耳を傾けた＝写真。

記念館事務局長の三沢亜紀さん(50)は「開拓団が手に入れた土地はもともと現地の人が耕していた土地だった」と説明。満蒙開拓の歴史は被害だけでなく、加害の側面にも向き合わなければならないとした。「歴史を学ぶことで、二度と同じことを繰り返させないでほしい」と話した。



豊丘村の宮下恭輔さん(16)は中学1年の時に記念館に訪れたが、以前よりも体験者の悲惨な実態が身に染みたという。「阿智高校に入学し、より身近な歴史になったからかもしれない」と話した。

2年生は、中国残留孤児の帰国支援に尽くした故山本慈昭さんが住職を勤めていた長岳寺（同村）も見学した。

戦争を忘れずに 声を上げ続ける

阿智村の満蒙開拓平和記念館を訪ねました。かつて日本は中国を侵略して満州国を建国、約27万人が開拓団として送り込まれました。1945年8月、突然ソ連軍が侵攻し、守るべき関東軍はおらず開拓団の人々は逃げまどい、飢えと寒さで大勢亡くなりました。このような戦争の未曽有の犠牲の上に平和憲法が制定されました。

しかし現政権は「積極的平和主義」の下に集団的自衛権の行使を容認する憲法解釈の変更を閣議決定し、安全保障関連法案の採決を強行し、南スーダンに自衛隊を派遣して、「人を殺し殺される」事態が現実味を帯びています。

教育勅語が賛美される風潮もあり、戦前の治安維持法にも等しい「共謀罪」を新設する法改正が国会に提出され「戦争のできる国づくり」が進んでいます。

同館のパンフレットに「前事不忘、後事之師」（前事を忘れず、後事の教訓とする）とあります。今こそ言葉の意味をかみしめ、権力を監視し「戦争は絶対に許さない」と声を上げ続けるべきです。

長野市　小林袈裟雄（無職・70）

謝恩と慰霊―清明節のハルビンで―

中島　幼八

春寒がまだ残る中国の東北部、大連からハルビンまでの旅だったが、かつての「南満鉄道」に平行する斬新な高速鉄道の車窓から眺められる東北大平原の雄大さ、長春あたりの地平線にさしかかったときの夕日、心躍る感動はこの大陸でしか味わえないようだ。北上するにつれて、気温が上昇するなか、20 度近くのハルビンでは、目の前の松花江がまだ厚い氷に閉ざされていた。大陸の北国の春も早足で収束されていくが、この季節の端境期に、日本から二つの訪中団、計 41 人が訪れた。

謝恩と慰霊への旅

本誌でも紹介していただいた昨年 10 月に行われた「中国残留孤児問題フォーラム」の第二弾として、この計画が組まれた。私たち残留孤児は高齢化するなか、最後の機会になるかも知れない中国への謝恩を表したい。またフォーラム開催に際し、一般の来場者から 120 通のアンケートが寄せられ、中国人養父母への感謝が縷々と綴られていた。そういう思いを基本において、ハルビン養父母連絡会の展示コーナーもある７３１部隊遺跡陳列館に場所を設定し、清明節（中国ではお彼岸）の時期を選んで、養父母への謝恩と被害者への慰霊を行おうと取り組み始めた。

フォーラムの準備段階において手弁当で応援してくれた実行委員会の訪中団のほか、富士国際旅行社主催の旅行団も４月４日の清明節に合流してイベントを行った。私はフォーラムの呼びかけ人として、あえて一般募集の旅行団に参加することにした。

旅程を組む段階でフォーラムの来場者が７人も集まり、旅行社提示の瀋陽・長春・ハルビンのコースを検討したが、平頂山遺跡・撫順戦犯管理所がある撫順の追加を強く要望された。急遽６日間のコースに変更され、大連から始まる旅になった。最終的に参加者は南の石垣島から、北の帯広まで、さらに京都・岐阜と首都圏からの方々で構成された。

＜撫順の奇蹟＞

私にとって久しぶりの大連、街をバスで回りながら、しゃれたビルの間に古びた戸建ての日本人住宅、満鉄本社ビル、中山広場の周りに並ぶ昭和初期のような建物、上野駅そっくりの大連駅舎など日本による植民地時代の遺物を目の当たりに見て、戦後７０年も過ぎたととても思えなかった。

露天掘り炭鉱の街で知られる撫順では、3000 人もの村人を崖下に集めて機関銃掃射で銃殺した関東軍の罪悪を暴露する現場の平頂山、累累たる遺骨の山を見て、思わず背筋が寒くなった。何回来ても、人間が鬼になったときの恐ろしさを感ぜざるをえない。その鬼を人間に蘇らせたのは撫順戦犯管理所であった。1000 人ほどの日本人 BC 級戦犯が中国側の寛大な計らいで全員釈放された。撫順の奇蹟で知られている。その管理所を見学するときに、岐阜からの参加者が展示物の一部始終を解説してくれた。初めて来たというのに長年

「中帰連」の活動で蓄積された知識をみごとに披露された。

その見学を通じ、私自身も改めて中国政府と人民の度量の大きさに脱帽する思いだった。あえて「改めて」といったのは、私たち侵略者の孤児が中国人養父母に救われて生き残れたことは、まさに同じ精神によるものであるからだ。

瀋陽の九・一八歴史博物館では、全館にわたって、日本の侵略に抗して全土に巻き起こった抵抗運動が系統的に紹介され、観る人に迫力を感じさせる。抗日ゲリラの楊靖宇の写真を前にして、石垣島の元教員は澤地久枝さんの「もうひとつの満州」を手にかざして、感動の声を上げていた。

長春では街全体がカイライ満州国の博物館の感がある。関東軍司令部とそれに接する司令官邸を見たとき、かつて驕る「大日本帝国」が横行跋扈する姿のぬけがらを見るようだった。

カメラの放列に驚く

いよいよハルビン入りのときだ。高速鉄道列車は渾春行きなので、途中駅の下車であった。急いでホームに降り立つと、思わず深呼吸をした。やはり故郷の空気は格別に感じられたのだ。しかし、私が育った牡丹江地区の田舎はここからさらに東へ500ｋｍもあるので、今回はとても帰れない。帰国して60年近くなるが、当時のハルビンはいまだに記憶に鮮明に残っている。昨年の５月上旬にも来たが、街中に薄紫のライラックが鮮やかに咲いていて、ハルビンはこの花に似合う街だなと思った。

４月４日清明節の日、空は青々として澄み切っていた。２つの団が２台のバスに分乗し、９時前に７３１記念館（侵華日軍７３１部隊遺跡陳列館）にあいついで到着した。すかさず取材のカメラ列に取り囲まれたが、この予想しなかった事態に団員たちはびっくり仰天した。ハルビン養父母連絡会の胡暁慧会長が早速新館の展示室へ案内してくれた。はじめて足を踏み入れたこの廃墟のエリア、私には魔窟のイメージがある。以前に森村誠一氏の「悪魔の飽食」を読むとき、あまりの残忍さに最後まで読めなかった。今回は当時の本部建物や裏にあった監房跡を確認したかったが、主催者として諸々の準備があったので、私個人の思いが叶えられなかった。

「反対戦争　熱愛平和」

イベントとしては、午前中に被害者への追悼会があり、午後には養父母への謝恩と交流会が予定されていた。綿密でわかりやすい展示を見た最後のところに犠牲者の名が一人ひとり表示されている前で全員黙祷し、菊の花を献げた。そのあと、裏庭にある「謝罪と不戦平和の誓い」碑の前で被害者への追悼会を行った。移動の途中左手に当時のボイラー室や煙突の残骸が原形のままで立っていて、下から見あげると、その大きさを実感することができた。

碑の後ろに鯨幕を張り、その前の壇上に、元孤児の葛西泰男氏は揮毫した「反対戦争熱愛平和」の幕を広げて、追悼の辞を読み上げた。「私たちは海を越えて、この松花江のほとりのハルビン市にやって参りました。当７３１部隊の廃墟を見学し、日本軍国主義による中国侵略の歴史への理解を改めて深めました。思わず全身戦慄を覚えるほどでした。私

は戦争孤児の体験を持ちながらも、あの侵略戦争では加害者側として中国東北部に渡ってきたのです。今日この碑の前において、犠牲になった多くの方々に深く謝罪し、追悼を捧げたいと思います。ただいまより、追悼会を執り行います。」と日中両言語で宣言した。全員による黙祷のあと、北中一永団長は日本側を代表して、日中両言語で「清明節の誓い」（別添参照）を読み上げた。さらに団員により、中国語の「松花江のほとり」、「鶴」（反ファシズムの戦場で倒れた戦士をたたえる歌）、「レクイエム」（モーツアルト作）の献歌を次々うたいあげ、しめやかに追悼会を終えた。その間中、跪いたままの参加者もいて、思い思いの謝罪を示した。

養父母への感謝の思い

午後は養父母への謝恩と日中両国に在住する残留孤児との交流を行った。養父母の健在者が少ない中、チチハルからは穆文霞さん（98 才）、長春からは崔志栄さん（95 才）、ハルビンからは李淑蘭さん（92 才）の三人の養母が出席された。両国在住の孤児によって、養父母に感謝する大きな寄せ書きや、養母たちにお礼の品々が贈られた。それに答えて李さんが立ち上がり、「日本の皆さんは今度我が家にお出でください。私が手料理でおもてなしします」と挨拶され、元気な笑顔を見せた。参加者は感激のあまり、次々と養母たちと抱き合ったり、手をとって踊ったり、感謝の気持ちを表した。

席上で、さらに残留孤児たちの体験も語られた。王林起（日本名：渡部宏一）さん（北京在住、80 才）は、流暢な日本語で養父母に育てられた状況を紹介した。自分が引き取られたあと６人もの子供が生まれたが、それでも養父母は自分を一家の長男として位置づけてくれた。養父が最後に残したことばは、「貧乏のためお前を大学まで出せなかったことは悔いが残る」と言葉を詰まらせながら言った。

王さんは昨年、「我在中国７５年」というタイトルで体験記を出版し、席上で中国側に贈呈した。福岡においても昨年、１８人の残留孤児が体験を記録し、「戦後７０年回憶集」を出版した。熊本から参加した庄山紘宇さんがそれを中国側に寄贈し、自分と妹が別々の養父母に育てられ、養父母たちを看取ってから帰国したいきさつを話した。地元の政治協商会議の要職まで担った席静波さん（黒竜江省林口市在住）は、山中で集団自決した死体のなかから反日ゲリラの兵士に発見され、二組の養父母に育てられた体験を紹介されて感動を呼んだ。身元が不明のため誕生日も分からず、養父母は自分の手元に置いて大事に育てたいため、「捂」と同音の５の数字が連ねた生年月日を戸籍に届けてくれて、それに手放したくない気持ちが込められていた。

「中国はわが祖国」

中国在住の孤児たちは、身元判明した王林起さんも、身元未判明の席静波さんも、口々に中国は自分の祖国であると言い切る。どうして日本に帰らないのかと聞くこと自体、野暮のように思われた。

東京から参加した葛西泰男さんも身元未判明の孤児であった。「侵略者の子供を育ててくれた中国人は世界で最も偉大な民族だ」と彼は強調した。養父の姓である葛を冠した日本名を名乗り、葛西家の開祖とも言えるので立派に生きていきたいと決意を語った。

拙い司会と通訳を兼ねて、私は下準備で入手した情報を補いながら進行をすすめた。午後４時ごろ近くになり、石垣島からの参加者が音頭をとり、琉球舞踊のカチャーシーを踊りながら、交流会を締めくくった。

さらに、夕食後にまた 30 人ほど集まり、残留孤児との交流や日々交流を夜遅くまで続けられた。

私は一般募集団と行動を共にしたが、参加者の皆さんは、実にレベルが高く、教えられることが多かった。毎回の食卓では様々なテーマを議論したりした。撫順の奇蹟とはなにか、福沢諭吉の脱亜入欧論をどう見るか。石原莞爾をどう評価するか。岸信介が「満州国政府」高官の時代にアヘン売買を実施したなど、話題が尽きなかった。

それにひきかえ、中国側の対応はいまいち熱意に欠けていたように思う。今回訪問した様々な遺跡や展示施設ではほとんど解説者が出てこなかった。もっぱら観光ガイド任せの説明で、通り一遍の内容に終わりがちだった。実際、高い旅行費用を払ってもこのような遺跡を見に行く日本人観光客は、問題意識を持っている人が多い。物見遊山というより、歴史の真相を知りたく、わざわざ海を渡って学びに訪れるのである。しかも、侵略戦争の被害者側施設はほとんど中国側にあるので、正しく歴史を理解するうえで、中国側の丁寧な対応が必要不可欠であると思う。

養母崔志栄さんと抱き合う団員

団員が書き上げた肖像画を喜ぶ養母たち

（なかじま・ようはち：1942 年、東京の三田で生まれる。東京都派遣の満州開拓団に家族と一緒に満州へ。敗戦時は３歳。幾多の辛酸を舐め、1958 年帰国。日中友好運動に参加し、通訳として活躍する。著書『この生あるは』発売元・亜東書店）

清明節の誓い

侵華日軍第 731 部隊罪証陳列館　金成民館長
ならびにご臨席の皆様

始めに、本日、新しく立派になった罪証陳列館を訪問し、このように追悼式典を開催することができましたことを訪問団として感謝申し上げるしだいです。

日清戦争以来の日本帝国主義による中国侵略の歴史は、中国人民に計り知れない苦痛をもたらしました。

とりわけ日中 15 年戦争においては、三光作戦による大虐殺、鴉片をつかった人民疲弊作戦などとともに、最も非人道的で戦時国際法にも明確に違反した毒ガス、化学兵器、細菌兵器の使用、そのための人体実験がおこなわれました。

今年は中国への侵略が本格化した盧溝橋事件と南京大虐殺事件からちょうど 80 年にあたり、この際あらためて中国人民への謝罪の気持ちを表明いたします。

わが国は 1945 年、中国への侵略に終止符を打ったのち、再び政府の手によって同じ過ちを繰り返さないことを誓い、平和条項を含む日本国憲法を施行しました。

大多数の国民は平和の到来を喜び、その後 70 年以上にわたって平和な時代を享受してきました。

しかし、最近、わが国の一部政治家たちは、過去の侵略に目をつぶり、いたずらに中国敵視を煽りながら、軍備増強に走っています。

今一番大事なことは軍備の増強ではなく、両国の民間交流を活発にし、国民の相互理解を深めていくことにあります。

わたしどもは、この観点から、日中不再戦の決意を行動で示し、中国と日本が未来永劫に友好と平和な関係を維持･発展させるため、粉骨砕身、奮闘することを誓います。

2017 年 4 月 4 日　訪問団団長　北中　一永

南京虐殺紀念館を見学して

望月 信隆

昨年末に南京大虐殺紀念館を訪れました。大虐殺の歴史的事実を否定的にとらえようとする政治家やその追随者に疑問を感じていたからです。中国名、侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館と、その別館として 2015 年に建設された利済巷慰安所旧址陳列館を訪ね、その感想を書かせていただきます。

逃げ惑う中国の庶民と理性を失った日本兵士たち

上海から日本の新幹線のような高速鉄道に乗り、一時間で南京に到着する。かつての日本軍兵士等は、この道を徒歩で剣と銃を肩に民家を襲いながら南京に向かったかと思うと、平和な街並みの背後に悲惨な情景が想像された。

大虐殺紀念館の建物正面には、中国人美術家による野外彫刻群がある。高さ８ｍほどの母子像は、命を奪われた我が子を力なく抱えて怒りそそりたつ。具象的表現を超えた恐怖と激怒を天に叫ぶ母子像は、ピカソのゲルニカを圧倒する象徴的な作品である。その周囲に空襲下を逃げ惑う恐怖の市民や子どもたちの姿は、歴史を忘れさせない美術史に遺る作品だ。

館内には侵略当初からの日本の蛮行を示す資料や写真が史実に沿って中国語と日本語により表記されている。当時の日本軍の戦果を伝える新聞記事も多い。爆撃の下で逃げ惑う恐怖の町の情景が立体模型のように展示されている。

日本軍の南京入城の映像や南京陥落のあの写真がある。「遂に敵の首都南京を占領、城頭高く日章旗を飜した」とあり、日本人が祝勝の歓喜の中で見た大阪朝日新聞社の「祝皇軍大勝」ポスターが並ぶ。従軍慰安婦の施設やその実態を示す資料や写真、強姦・掠奪・殺害等、常軌を逸した兵士の姿がある。大義のない侵略戦争の中で、兵士は人間としての理性を失い残虐性を露わにし、殺人鬼集団となる軍隊の恐ろしさを写真が語っている。

館内の膨大な資料は見学者に当時の恐怖を再現させる。この虐殺の被害の実態を、隣接する「万人坑」という遺骨陳列館で見ることができる。虐殺後に遺骸が折り重なるように棄てられていたという場所に棺桶のような建物が作られ、遺骨はその床下に眠っている。地底深くから物言わぬ遺骨たちの 80 年前の無念の苦しみが聞こえてくるようだ。

「前事不忘、后事之師」の言葉にひれ伏す思い

今、この紀念館は中国の学校教育の一環として、子どもたちの学習の場である。若い人も年輩の方も中国各地から訪れるという。80 年前の出来事を知らない若い世代の

人たちはどのような思いを抱くだろうか。親兄弟を殺され、首都陥落の屈辱を味わされ、尚、南京大虐殺は捏造だと声高に叫ぶ一部の日本人がいる状況に、日本人を恨む気持ちはつのると思う。その苦しい葛藤の中で生きる中国の人たちの胸の内を思うと、侵略戦争の加害国と被害を受けた国の子どもたちが次の世紀に仲良く生きていくのは可能かと考えさせられた。

しかし、館内出口近くの頭上壁面に大きく書かれた言葉に私は救われる思いがした。それは「前事不忘、后事之師」と書かれている。察するに、過去の過ちを忘れずに、これを師として未来に生かせ、と自分ながらに解釈した。中国人の寛大で奥深い心の前に、私はひれ伏す思いがした。かつて周恩来総理が「過去の過ちは許すが、その事実は忘れませんよ」と寛大に相手に忠言しながら、方正日本人公墓建立を許可された温かい計らいを思い出した。日本人として忘れてはならない南京大虐殺・世界記憶遺産を、広島・長崎と同様にたくさんの人が訪問し、戦争をしない国をつくっていくことが大切と強く心に感じた。

（もちづき・のぶたか：1944 年生まれ。公立小学校の教員を定年退職後、書道教室の講師。毎日書道会会員）

銘柄米産地慶安県の真剣さ

―中国の「米どころ」を訪ねて思う―

佐藤 喜作

一路、ハルピンへ

東京の中央区日中友好協会の２回目の中国視察旅行を計画した。私は 2014 年に２回、中国東北農業大学、東北大学と黒龍江省農業科学院などの訪問でハルピンに行っている。今回は仕事を離れて観光を主体に計画されたと思っていた。一行９名は日本に居住する東方(ひがしかた)暁(あきら)氏の計画により、2016 年 9 月 11 日～14 日の３泊４日の日程である。

前回までは成田から大連に、大連から新幹線で陸路ハルピンへの行程であるが、今回は空路成田―ハルピン便が開通して大変便利になり、経費も節減出来、北出夫妻、日野原、佐々木、福間、秋田、松下、梶、佐藤の面々で約４時間の飛行でハルピン空港へ。国内空港だからこじんまりとして小さいが今は、国際線も計画し新規建設中である。先に訪中していた東方氏の出迎えを受け、大船に乗った気分である。行き帰りの乗機率も中国人を中心に 70～80%位である。

それにしても、外国に来た感じがしない。ハルピンは大都会でビルも多く、人々は日本人との区別が困難だし、服装も大して変わらず、日本人が和服や下駄を棄てたように、中国服姿は全く見られない。それにホテルの食事はバイキング形式で、これまた何処も変わりないから、外遊の楽しみは半減する。しかし区別出来るのは言葉だけで、これには参ってしまう。

小型バスでハルピン市街に 30～40 分ほどでホテルに着きチェックインし、直ぐ道路の向いから始まる中央大街（年中、歩行者天国）を散策しながら、最先端の松花江まで２㌔くらいか、散策者で満員である。両側のビル街はロシア風の雰囲気に包まれている。夕闇がせまるにつれてネオンが輝き、至るところで音楽や大道芸人、そして集団で踊る女性グループが見られる。我々は僅か 10 名なのに先端と後尾が長くなり、迷子が出る事が心配で落ち着かない。

松花江岸の広場は大きなモニュメントやショウが開催され喧騒である。そして同じ大街を帰り、ホテル近くのレストランで晩餐会になるが、農業大学の韓建春先生と前回も会った若い夫婦の教授が出席され、嬉しさで旧交を温めた。なんと言っても、東方氏の通訳を介してなのでもどかしさを痛感する。韓先生は酒豪で、前回はあの強い酒を乾杯の連続で飲みこんでいたから些か心配し、健康維持をと忠告した故か、今回は酒があまり進まない。となるとまた心配してしまう。ほどほどに酩酊してお開きになったが、明日も行く先の慶安で合流するという事で、解散する。

２日目は慶安県だ

慶安県は初回のハルピンに来た時に訪問しており、水稲の大産地である。そして黒竜江省の農業モデル展示所もある。

ホテルの朝食はバイキングで 3 種の粥はあるが、ご飯は出ていない。百姓腹の私は何を食べても最後はご飯を食べる癖があるのでがっかりである。黒竜江省はだいたい日本の面積と同じであり、米生産は中国ＮＯ．１なのである。市街から松花江大橋を渡り新市街を通り、高速へ入る。片道２車線は北東に走るが、両脇の白樺並木は樹齢 20～30 年位か、整然と 3～4 列に植栽され美しく、バスから飛び去って行く。その間、東方氏の軽妙なガイドで飽きることなく慶安県の高速道入口に到着。驚いた事にその広場には、慶安県の県長以下、役人が出迎えてくれたのには仰天してしまった。

先導車に次いでバス、後続車 2 台で出発したら窓外に居る警官が挙手の敬礼で見送っている。行く先々の要所の警官も敬礼の送迎でこれまた驚き恐縮してしまう。そして有機水田の立毛（稲）を見たが、もう少し肥料分が欲しい感じである。アイガモ栽培の看板の田もあったが見られなかった。次いで会社経営の緑色農業水田の見晴らし台で、広範な面積を視察。その会社の経営する大型精米工場の施設は日本の農機具メーカーである佐竹の機器である、と女性社長から説明を聞く。

近くに数少ない朝鮮族も生活しているようで、その記念館があり、その文化を残すように朝鮮舞楽の銅像も建立されていた。

ブランド化された慶安米

次いで黒竜江省農村信用社の会議室で県長以下、副県長３名部長クラスの幹部等 20 名余とのディスカッションで、最も真剣なのは県長であった。米は慶安米としてブランド化されている。目標は、県を食糧基地とする、美味い米、増収品種改良育種の方法などがテーマであった。この質問から我が郷土秋田県を思い出し、次のような考えを述べた。

慶安県は秋田に類似している。それは稲作に熱中して今岐路に立っているが、やがて慶安にも通じる。美味い米も増収も進み、農家が安心した農業は今、継続困難となりピンチを迎えている。これらを参考にすれば、食糧基地を米主体の慶安健康合格基地にする。それは慶安の示す「安全の慶び」の基地である。まず産地の農民、消費者が、質と量で安全である、ことである。

そして米消費の方法がチャーハンや粥中心であれば、そんなに味の追求は要らないだろうとも話す。県としては輸出用の米の栽培を考えているのかも知れない。が、まず農民が健康であらねばならない。病む農民の栽培した農産物は消費者あるいは輸出先国でも敬遠される。中国で大豆の失敗（遺伝子組み換え大豆 80%輸入国になった）を考えると、世界各国の食糧は自給を旨とする必要を感じた。全世界がそれぞれ自国の食糧を自給してこそ世界平和の根源であると。

制限された時間で核心部分に入れぬまま終了して遅い昼食の会場に。昼食会には県長以

下 4 人ほど陪食されたが、その経費は個人持ちであるという。何かこんな機会もあろうかと、自著 2 冊を県長に贈呈したらすぐウエトレスを呼んで渡していた。記念写真に入ってくれと依頼したが入らない。目立ったことはご法度らしい。田圃で合流した韓先生は、近くに用事あるとのことで別れる。ビール、酒も出てご馳走になり、ハルピンに帰るのに、県長以下幹部が高速入口まで見送って来られる。申し訳なく、こんなに真剣な県長以下の農業振興に熱意を持ち努力されることに敬意と成功を祈念しながら感謝し、別れを惜しんだ。

３日目はハルピン市内の観光　東北虎保護区　餌は羊

昨日も通った松花江大橋を渡り新市街の郊外にある虎保護区に、時間が早く少し待って鉄格子バスで園内に絶滅危惧種に指定の虎を人工繁殖して自然に帰す事業もやっている。

虎を見るのは初めてで、想像以上に大きい。加藤清正の虎退治を聞いたことはあるが、これは大変なことであったろう。群れで寝そべるもの、孤独なものなど、餌を売って客が肉片を食わせるところもあるが、そのときは先を争うことなく、順番を決めているのか一頭だけ出てくる。しかし生きたチャボらしい鶏を与えると数匹が立ち上がり争って捉える。獲得した虎は櫓の台に上がり羽毛を毟り取り、そして一人占めで平らげる。他の虎がそれを横取りするような動きは無い。見たところ猫を大きくしたようにおとなしく見えるが油断禁物、ある夫婦が乗用車で入り奥さんが運転変わろうと車外に出て襲われた事故があったという。

ロシア聖教、ソフィヤ大教堂

歴史ある建造物であるが、文化大革命の時、外部をバラック建造物で覆い、なんとか破壊の難をまぬかれたということで、内部には古い時代の写真などが展示されている。前回は夜でライトアップされ、お伽の国のお城のような雰囲気であった。

旧満州鉄道本社

大きなビルの前には右手を上げた毛沢東の巨大な銅像が建ち、いまは鉄道局に使用されていて写真撮影なども煩いほど注意があった。

地下鉄

本社前でのバス駐車は不能なので、バスは地下鉄のひと駅先の停車場で待っており、我々は電車に乗車する事になり、予定外に乗る地下鉄は新品でピカピカ光っている。そして一行が乗車したら、座っている人たちが立って席を譲ってくれ心温まる風景だった。それも渋々ではなく、極めて自然だからまたうれしいのだ。台湾でもそんな経験したなー、あの時は高校生たちで入ったらパッと立つのであった。日本人に見せたいナー。

旧関東軍司令部

昔は泣く子も黙るといわれた関東軍司令部の建物は 2 階建てと見たが、その姿は厳しさはなく極めて瀟洒な美しいもので想像とは裏腹、しかも今は高齢者大学になって老司令部

が老後にこんな役割で生かされている事に感激した。

秋林デパート

最後に秋林デパートで主として米の価格の調査をした。驚いたのはあの臭いドリアンも果物群に並べられていたことである。

訪問したかった方正県

今回も 2 年前に訪問した方正に行き、改めて折衷苗代中心で稲作指導した藤原長作さんの活躍ぶりなど調査したかったが残念ながら、時間も無く帰国してしまった。慶安のように懸命に努力されていると推定されるが、より一層発展されることを祈念して辞去した。

古木、老木の見えない不思議

東北中国は歴史も古いから、特に農村部には老木が見られる筈なのに、目に入る樹木すべて若木で前回の訪中以来、不思議に思っていたが、池上彰の「そうだったのか中国」によると中華人民共和国建設時代は農業振興と製鉄振興が命題で、高炉にあらざる製鉄を農村でも担当し、その熱源に木材を使用、不足分は木質家具まで利用したとあり、樹木は総て製鉄に使用されたからで、私の疑問は解消された。

これからの課題

今世界中が混沌の中でもがいている。地球生命の余命は 3 分を切ったと指摘される。これを回避するには原点に帰らねばならない。生きることから考えねばならない。その生きる三大要素は空気、水，食である。食だけは人間の手にある。即ち農である。全地球諸国はまず、自国食料の自給確立運動が最大の解決策である。世界各国の農村部が安定すれば平和が訪れる。衣、食、住そしてエネルギーは安全な農によってもたらされる。農を大事に、自信を持とう。

（さとう・きさく：1927 年、秋田県にかほ市生まれ。日本有機農業研究会理事長、社団法人農協協会代表理事会長。1953 年から 1 年半、デンマーク農業実習生として渡欧。著書『村と農を考える』『農協が築く自給自立運動』『百姓にとって農協とは何か』など著書多数）

ひとり、ぶらりと方正へ

橋賀 秀紀

成田からハルビンまで片道 500 円。中国の新興旅行会社を母体とする春秋航空日本の就航セールは鮮烈だった。往復総額でも 5200 円。これまで往復１万円以下で香港やソウル，マニラ，台北などに行ってきたがさすがにこの価格はない。しかし，時期は３月の初旬。ハルビン名物の氷祭りもメインのものは終了している。ではどこに行こうか…。そのなかで浮上してきたのが方正であった。

『大地の子』に触発され

もちろん方正のことは，以前から耳にしていた。1995 年に NHK で放映された山崎豊子原作『大地の子』を観て以来，満蒙開拓団に関心を持ち，関連の書籍はいくつか読んでいた。2013 年夏には極東ロシアの旅行とあわせて，埼玉県の中川村開拓団跡を訪問した。このときのことは『地球の歩き方 大連 瀋陽 ハルビン』のコラム，「満蒙開拓団入植地を訪ねて」にまとめてある。三江省樺川県小八浪に入植した中川村開拓団を訪れたのは理由がある。

一橋大学の経済地理学の水岡不二雄ゼミのレポートをたまたま発見し，興味を惹かれたからだ。その後，『満洲に消えた分村―秩父・中川村開拓団顛末記』や『凍土からの叫び』といった本も目を通してから現地を訪れた。満州でも大連・奉天・新京・ハルビンは満州国時代の建造物が比較的よく残っているし，また，それらに関する情報もそれなりに存在する。しかし，満蒙開拓団についていえば，当時の面影を失っているところが少なくない。中川村開拓団跡でもほとんどが新しい家屋に建て直されており，ようやく開拓当時の家を見つけて見学させてもらうことができた。このときは通訳をともなっていたので現地の人に色々と質問してみたが、開拓団が集団で殺されたというストーリーが、中国人が日本人に殺されたと誤解して伝わっているなど、地元では当時のことがきちんとうけつがれていない印象を受けた。もちろん他方では、混乱し必死の思いで逃避行した日本人開拓団が中国人を殺してしまったということは私も聞いている。
（http://hit-u.ac/excursion/09manchuria/0827/index.html）

開拓団とのかかわりはないが…

個人的に開拓団と何かつながりがあるわけではない。強いて‘満州’とのかかわりでいえば，鹿児島で生まれた母が幼少時，一時期ハルビン近くの双城にいたことがある。それも戦争が終わる前に帰国している。いったん満州に移住するつもりで来てみたものの，最初に聞いていたのと話がちがうということで帰国することになったらしいが，幼少時だったゆえに母も詳しいことはわからないらしい。

しかし，時間の経過とともに満蒙開拓団の直接経験者が減っていくのが現実であり，自分のような直接開拓団にかかわっていない人間も巻き込みつつ，このできごとを後世に伝えていくことが重要なのではないかと考えている。

さて，以下は『週刊東洋経済』に連載している「サラリーマン弾丸紀行」の「旧満州へ日本の痕跡を求めて」（4 月 1 日号）の記事をベースに加筆修正したものである。方正について詳しい皆様にはいまさらのことも少なくないだろうが，開拓団にかぎらず，2017 年の方正が，一般旅行者の目からみて，どのように見えたのかという観点でお読みいただけたらと思う。

在日中国人の約７％が方正出身

2006 年に起きた，中国人妻によるインスリン殺人未遂事件を覚えているだろうか。犯人の鈴木詩織の出身地である方正は,中国東北地方の黒龍江省にある人口約 20 万人の都市だ。13 億 8000 万人を数える中国からみればわずか 7000 分の１の人口でしかない。にもかかわらず，在日中国人の約７％が方正の出身だという。方正の人口の約半数は日本在住ないし，日本滞在歴がある。『地球の歩き方 大連 瀋陽 ハルビン』の編集をしている中村正人氏によると，「ハルビン出身です」という在日中国人もよく聞けば方正だというケースに少なからず遭遇するそうだ。確かに中国の行政区分では「ハルビン市方正県」になっているので間違いではない。しかし方正と言っても一般の日本人は知らず、ハルビンだと誰でも知っているから、そう言うのかもしれない。

いったいどんなところなのだろう。2017 年３月，黒龍江省の省都ハルビンから東に約 180km，高速バスで２時間 30 分ほどの道のりだ。地下鉄 1 号線の哈東站近くにある三棵樹バスターミナルから早朝から夕方 16 時ごろまでほぼ 1 時間おきで出発している。

方正が近づくと，とうもろこし畑に代わって，急に水田が増える。もともと水田耕作は行われていたが，1980 年代に藤原長作という岩手県の篤農家が技術指導を行い，収量がほぼ倍増したらしい。

さびれた日本風情街

街外れにあるバスターミナルからとりあえず散歩してみる。方正は一見すると中国のどこにでもある地方都市だが,よく見ると個人商店の看板の右下に小さく日本語が書かれている。2006 年に県政府が新規開業する商店の看板には日本語を表記することを義務づけたらしい。親日をアピールし，日本からの投資などを期待したのだ。もっともエステをＩステと表記するなど，日本人としては突っ込みどころ満載である。また，その後中国での反日ブームもあり，一部は剥がされた後も見受けられた。

日本風情街とよばれる商店街ものぞいてみたが,だだっぴろい歩道に日本を彷彿とさせるデザインの街灯があるだけだ。どこにも日本の文字は見えない。その商店街に隣接して，帰国した華僑に優先して提供する２階建て高級住宅地の僑村もある。しかし手前の１軒には上半身裸のおじさんの姿が見えたが，背後に並ぶ家はどれも空き家のように見える。東日本大震災後，約 3000 人が日本で蓄えた資金をもって帰国したため，方正はちょっとした好景気に沸いた。しかし，２階建ての高級住宅は暖房の費用がかさむため敬遠され，代わりに大楼とよばれる高層マンションが人気を呼んだらしい。

茅葺きの民家がある伊漢通

方正から東に７km ほどに位置している伊漢通という集落にタクシーで向かう。運転手は「奥さんは中国人か」としきりに聞いてくる。やはり日本人の中年男が一人方正にいるとそうとらえられるのか…。

伊漢通は川幅が１km にもおよぶ松花江に面しており，古くは物資の輸送基地として栄えたが，戦後はソ連が略奪した物資をここから船で運び出したという。伊漢通には茅葺きの民家も見受けられる。もはや崩壊しかかった空き屋がほとんどだが，男性３人の人影が見えたので思い切って声をかけてみた。筆談で開拓団のことを尋ねてみるが話が通じない。しかし，オンドルの構造などはかつて訪れた中川村開拓団の民家と共通していた。沖縄からの開拓民は時としてマイナス 30 度におよぶこの冬をどう堪えたのだろうか…。

方正にも新幹線が…

伊漢通から７km ほどの田舎道を歩いて，日本人公墓に向かう。途中，ハルビンとジャムス間で建設中の新幹線（CRH）の高架下をくぐる。かつてはハルビンから未舗装の悪路を経てたどりついた方正も，いまや高速道路で 2 時間 30 分。2018 年に CRH の哈佳線が開通すれ

ば，ハルビンと方正はおそらく 1 時間強で結ばれるはずである。

雪の公墓へ一人で参拝

大戦末期，ソ連軍や中国の民衆からの攻撃を避けるために逃亡を続けていた満蒙開拓団の多くは関東軍の食糧補給基地があった方正をめざした。方正には収容所が設けられたが，8640 名のうち，自決やチフスなどによる病死が 2360 名，現地の中国人に嫁ぎ，残留婦人になった者が 2300 名を数えた。残留孤児ももちろん多数発生した。病死した人があまりにも多く、5000 人ほどの遺体を焼いたという。その方正の地に 1963 年，周恩来首相の許可によって日本人墓地ができ，多くの日本人参拝者を迎えてきた。しかし，2011 年，公墓の敷地内に新たな慰霊碑ができると反日活動家によってペンキがかけられ，わずか 10 日後に撤去されてしまった。ここはふだんゲートが閉じており，本来は黒竜江省外事弁公室の許可がないと入れない。たまたま大学時代の後輩が方正友好交流の会事務局の大類善啓氏と同じ職場であったことから大類氏に取り次いでいただき，大類氏から外事弁公室の方の連絡先を教えていただいた。そこで事前に連絡したものの，1 度話した後は何度かけても携帯電話がつながらない。そこで外事弁公室に電話したところ，なぜか切られてしまった。そこで，やむなく直接訪問することになった。しかし行ってみれば住み込みの管理人宅が敷地内にあり，自由に出入りができた。公墓は雪に覆われていたが，管理は行き届いていた。静謐ななか，一人手を合わせる。

現代に結びつく開拓団の悲劇

極寒の冬をろくな防寒着もなく，次々と倒れていった人々はもちろん，生きていくために現地の男性の妻となり，あるいはこどもを預けるしかなかった無念を思う。70 年あまり前，この地で起きたことを想像することは難しくなってきているのだろう。しかし，1945 年から 1946 年にかけておきた方正でのできごとは，戦後の日本にも影響をあたえ続けた。

1970 年代以降，残留婦人や残留孤児が日本に帰国したことをきっかけに，方正と日本のつながりはふたたび強くなった。現在，中国女性との国際結婚を謳う業者の多くは方正に拠点を持っているそうだ。そういえば結婚式用の写真撮影スタジオが市街地で目についた。もっともこうした結婚のなかには，日中の価値観のちがいから行き詰ったり，永住権獲得を目的とした偽装結婚が見られたりするなど，一筋縄ではいかないものも多いという。

中国での嫁不足は深刻で、近年ではベトナム女性との国際結婚が増えたり，日本人との結婚から韓国人との結婚にシフトしたりするなど，方正の経済は少なからず、外国との関係が左右しているようである。

先日，『地球の歩き方 大連 瀋陽 ハルビン』の編集をしている中村氏とお会いしたとき，2018 年 11 月に発刊予定の新しい版のコラムに方正訪問のことを書かせてほしいと頼み，快諾を得た。これから東北地方を訪れるであろう若い世代に，方正のことが少しでも伝わり，一人でも現地に足を運んでくれる人が増えれば…と淡い期待をいだいている。

（はしが・ひでき：トラベルジャーナリスト。筑波学院大学非常勤講師。東京生まれ。訪問国は 114 か国。母が幼少時代ハルビン近郊に在住していた。中国東北地方には 3 回渡航。満蒙開拓団・中国の現代史に関心を持つ）

橋賀秀紀さんが撮った写真

日本風情街の裏にある高級住宅。
しかし空き屋が目立った。

開拓時代のものと思われるうような伊漢通に残る民家。
手前は水田なのも方正らしい

早朝の方正バスターミナルから望む朝焼け。
極寒のため、工場の煙は上昇しない。

ハルビンの傅家甸に残る古い家屋。
阿片窟として知られた大観園を彷彿とするが再開発で急速に消えつつある。

優れた師、有難き友

歩平先生の死を悼む　（第１回）

石　金楷

■空港で悲報を聞く

2016年８月16日、私は東京からハルピンの実家へ帰った。空港へ一歩、降りたとたん、駆け寄ってきた友人の口から出た言葉が、２日前、歩平先生が病死された、という訃報だった。この信じられないニュースを耳にして、私は、辛く悲しい思いの中で、歩平先生との、さまざまな交流の思い出が胸にこみ上げてきた。

歩平先生の原籍は北京である。１９４８年、北京でお生まれになった。生前、中国社会科学院近代史研究所所長、中日共同歴史研究委員会・中国側首席、中日関係史学会副会長をつとめられ、著名な歴史学者であり、中日問題の専門家であった。

私が先生に初めてお目にかかったのは２００１年である。この時、私はハルピン市日本残留孤児養父母連絡会（以下、連絡会と略称）の秘書長になったばかりだった。仕事の関係から連絡会は黒竜江省社会科学院歴史研究所と密接な交流関係にあった。

■吉岡先生の表彰式で

この年、日本の成田赤十字病院の病理検査技師・吉岡稔先生が、それまで連続１２年間、自費で中国の東北地方に来られて、残留孤児の養父母や一般民衆のために、すべて無料で病疫検査をしてこられた、という理由で、中国紅十字会の総会で「中国紅十字会名誉会員」の称号を授与された。当時、歩平先生は黒竜江省社会科学院副院長という立場だったが、私たちは、この席に歩平先生をお迎えすることにした。私はこの時、初めて歩平先生とお目にかかることができた。社会科学院歴史研究所の車霅紅さんの紹介で、初めて歩平先生にお目にかかったのだった。

■松花江のほとり

黒竜江省社会科学院は、美しい松花江のほとりにあり、歩兵先生の事務所は８回にあった。部屋の広さは約３０平方メートル、壁の大部分は本棚が占めている。私たちが見えたのを知ると、彼はすぐ立ち上がった。１メートル８０センチ余りの長身で、痩せた頬に黒縁の眼鏡をかけ、学者の風格を備えておられた。車霅虹研究員の勝機を聞きながら、私の手を固く握りしめた。歩平先生の気さくな感じが、私の緊張と不安を、たちまち消し去った。私が彼に連絡会の近況を報告すると、彼は私を励まし、吉岡先生表彰パーティへの招待を申し出たら、喜んで承知してくれた。その翌日、彼は早速、私たちの職場を訪れ、使い慣れた日本語で、吉岡先生とじっくり話をされていた。事情を知っている人の話によると、歩平先生の日本語は、シビアな学術研究の合間を縫って身につけられたものだそうである。彼の勤勉と努力は、全く余人を敬服させずにはおかないものだ。だれがお願いしたのでもないのに、先生は誰の発言に対しても、ご自分から進んで日本語の通訳をされた。彼のこうした、少しも苦労を厭わない人柄は、多くの人に大変、深い印象を与えた。

■会の活動を評価

その後、連絡会の対外友好交流活動に対して、歩平先生は積極的に支持してくれた。彼は「中国の養父母と日本の残留孤児は、歴史の特殊な条件のもとで形成された、ユニークなグループである。戦争が両国人民にもたらした残忍な傷跡を明るみに出したと同時に、

中国人民の「怨みに報いるに徳をもってする」という尊い活動の軌跡を残した、と評価した。そして歩平先生は、連絡会が積極的に展開した対外友好交流活動、および連絡会が行なってきた歴史資料の収集と整理について、高い評価をしてくれた。

（日本語訳　　奥　村　正　雄）

（せき・きんかい：ハルピン出身、３年前に、残留孤児だった夫人と日本に帰国、永住。現在も中国ハルピン市日本残留孤児養父母会事務局長として活動している。東京都在住）

アフリカには1890年代からエスペランティストがいた！

―第6回アフリカエスペラント大会に参加して―

田平正子

「今や国際主義は国家を前提とするからダメだ。今こそ、＜我々は人類の一員だ＞という思想、民族や国家への帰属を超えて、個としての人間の連帯と友愛が大事だと考えるエスペラントの創始者・ザメンホフの人類人主義 Homaranismo が地球を救う」と、近年、力説する本誌編集長の大類善啓氏より、アフリカにもエスペランティストがいることを紹介してほしいと言われ、アフリカエスペラント大会に参加した模様をお伝えしよう。

100人以上が参加したアフリカエスペラント大会

2016年12月24日から31日までタンザニアのブンダで行われた国際語エスペラントによる通訳なしのアフリカエスペラント大会に夫と参加した。国際語と言っても国家と国家間の言語でなく、人民と人民間の言語であるから、民際語と呼びたい。

世界エスペラント協会主催の第6回アフリカエスペラント大会は、「平和と発展」のテーマのもと、100人以上の参加で、タンザニア、南アフリカ、トーゴ、ベナン、ブルンジ、ケニア、セネガル、コンゴ共和国、コンゴ民主共和国、ザンビア、ナイジェリア、マラウィ、ルワンダ、マダガスカルからと、アジアから韓国と日本、アメリカからカナダとブラジル、ヨーロッパからスイス、フランス、ベルギー、チェコ、ハンガリー、スウェーデン、アイスランドからである。

民族色豊かな大会だった

初日は自己紹介やエスペラントの歌やタンザニアの民族舞踊でにぎやかだ。翌日はエスペラントの動詞（他動詞と自動詞）の研究会、アフリカのエスペラント活動の紹介、私の珠算講座（学校での算数教育のため）と風呂敷講座（自然保護のため）も。

次の日は文法研究会の後、世界エスペラント協会のアフリカ委員会の活動について討論。参加者から自国には教材が少ない、という意見があったが、世界エスペラント協会副会長が大量の本を持参していたので解決。インターネットでの教材も役に立つ。後日談だが、彼はパソコンを持たないので、夫婦で無理して500ドル送金したら早速ノートパソコンを買って、感謝のメールが来た。

27日は南アフリカや、ユーラシアエスペラント文化センターの活動の紹介。タンザニアの公用語スワヒリ語講座も。スワヒリ語はエスペラントや日本語と同じく母音が aeiou なので発音が楽。エスペラント教師国際連盟によるエスペラント国際試験もあった。

アジアのエスペラント運動についての講演は2016年の韓国エスペラント大会、日本エスペラント大会、アジアエスペラント大会（中国で）の映像をアジアエスペラント運動委員会会長が上映。この日は偶然私の75歳の誕生日で、参加者が祝ってくれて嬉しかった。

28 日はブンダの副市長（女性）がエスペラントも少し交えて挨拶。アフリカ委員会（5 人）や大会実行委員会（6 人）の紹介。「民族の夕べ」では演奏会や結婚式も見物した。

29 日はタンザニア初代大統領の生家（現博物館）と墓地へ遠足。夜はエスペラントグッズによる私のオークションで、うんと安い値段で売って、14 ドル+51,200 タンザニアシリング（≒23 ドル）の売上。世界エスペラント協会の「アフリカ基金」へ贈った。

30 日は大会委員長（タンザニア人）がエスペラントを教えている小・中学校を見学。日本の文科省や教育委員会のようにうるさくなく、エスペラントも自由に教えていいとのこと。学校はヨーロッパやアメリカのエスペランティストの協力でできた。生徒 300 人中 200 人が女子で女子寮あり。自宅から学校まで通うのが遠すぎるから。委員長は 4 つの村の村長も兼ねて多忙。最終日は国際試験の合格者発表。大会宣言発表。タンザニアエスペラント青年団も発足。珠算講座にいた若者がソロバンとエスペラント版練習帳が欲しいと言うので、練習して友達にも教えられるよう、ソロバンと練習帳 20 人分をあげて荷物が軽くなった。ブンダからムワンザまでバスで 2 時間、宿泊。

1 月 1 日ムワンザ空港からダルエスサラームに飛び、国際線に乗り換え成田、羽田、伊丹経由で 2 日夜に京都に帰宅。アフリカのエスペランティストのエスペラントのうまいこと！「会話を習ってないのでしゃべれません」と言い訳せず、考えが頭と心にあるから言葉が出てくる。勿論、初心者の間は聴く・読む・書く、の練習を積むが 0 歳児を連れて参加するから、赤ん坊は早くからエスペラントを知る。

不公平なことに、彼らは外国へのビザが難しい。なので、こちらからアフリカへ行こう！アジア人がアフリカ人と会うのでなく、人と人が会うために。

アフリカには 1890 年代からエスペランティストがいた！

エスペラントがザメンホフによって発表されたのは 1887 年だが、アフリカには 1890 年代からエスペランティストがいた。殆どがヨーロッパからの移民である。その後 100 年の間にアフリカの政治的事情も変化した。各民族の諸言語以外には、フランス語、英語、ドイツ語などが使われていたが、エスペラントについて興味を持たせ、エスペラント会を作ったり雑誌を発行したりする試みがなされた。が、継続するのは難しかった。現在は世界エスペラント協会のアフリカ委員会が、ベナンに事務局を持ち、２人のボランティアが常駐。

エスペラントの広報、通信教育、著作物の発行、機関誌「アフリカのエスペラント」(2006 年 6 月創刊、すでに 29 号まで出ている）の編集発行など。インターネットで誰でも無料で読めるので、〈Esperanto en Afriko〉で検索してほしい。アフリカ委員会の委員は５人（トーゴ、ベナン、ブルンジ、コンゴ民主共和国、南アフリカから)、また、その協力者は 10 人（上記以外からもマダガスカル、ケニア、タンザニアなどから)。委員も協力者も、無報酬のボランティアである。活動の経費は会員制の会費もないことから、世界エスペラント協会の「アフリカ基金」で寄付を募っている。

また、世界エスペラント協会主催の世界エスペラント大会には、大会参加旅費を寄付の中から少額援助することもある。残念なのはたとえ費用が賄えても、ビザを取るのが難しい、という厳しい事情。

2015 年に京都で行われた第 63 回関西エスペラント大会に、南アフリカのエスペランテ

ィストを招待したが、ビザが間に合わなかった苦い経験がある。

部族語がたくさんある中でのエスペラントの意義

アフリカに限らず、どこでも言えることであるが、国語、方言、民族語、部族語はそれぞれ尊重する。しかし、それらの言語が違う者同士が理解しあうには共通の言語が必要になる。その場合、政治的・経済的大国の言語を共通語にするのは不公平である。劣等感も優越感もなしで対等に使える言語でなければならない。今までに民際的共通語として発表された言語の中で、唯一普及したのがエスペラントである。誰もが勉強して使えるようになる、という平等で歩み寄りの精神が居心地いいのではないか。

右から筆者の田平正子さん、夫の稔さん、隣がコンゴ民主共和国から参加した Mana 夫妻と赤ちゃん。文中、500 ドルを送ったら喜ばれてすぐパソコンを買ったという人だ。

集合記念写真。前列左端に田平正子さんが写っている

（たひら・まさこ:母の初恋の人と祖父がエスペランティストだったのが運命か、エスペラントに魅かれた。世界エスペラント協会委員も日本エスペラント協会役員も 70 歳で辞め悠々自適。外国人エスペラント旅行者を受け入れ、民際交流を楽しむ。京都市在住）

子どもたちにこそ見せたい知らせたい国「コスタリカ」

～未来の主権者を創る“平和ノーベル賞”ムーブメントを起こそう！～

千田 優子

60 代のうちに、外国行こう！そう思い立って、たまたま見つけたツアーでした。
コスタリカは中米にある。面積は大体、北海道。人口は約 500 万人。うち 100 万近くは隣国ニカラグアの難民なのだそうだ。何？　治安はどうなの？
エコツーリズムの発祥の地。ちょっとパソコンで調べてみると、何？　ワニが昼寝してる？？？
アメリカ経由で、往きが２日、帰り２日の移動時間がかかり、中４日という旅行日程であった。つまり、遠い！　はき慣れた靴を、が条件。ヤレヤレ。

「武器を持たない」という憲法を持つ

日本で、比例代表制の選挙制度を始めた時、ある政治家が「コスタリカ方式」と表現した。「政党比例代表方式」という投票者の数に応じた選挙制度をもっている国なのだ。そして、日本と共通することは、「平和憲法」＝戦争しない、武器は持たないという憲法をもっており、実際＜軍隊＞をなくした国である。兵隊の数だけ教師を！　で 1949 年憲法制定以来実践の国。後は、行って見るべし。
伊藤千尋(前朝日新聞特派員)という人が案内役で、事前顔合わせに行ってみると‥‥まぁ、大体私とどっこいどっこい、現役終わって第２の人生やってる世代 15 人。しかし、その生き様は相当な御仁がいて、ピースボート参加者数名。で、「日本の憲法九条に平和ノーベル賞を」との運動をと聞いたコスタリカの国会で、日本の九条と一緒にコスタリカにも平和ノーベル賞をと国会決議を上げたので、連帯の挨拶と感謝に行く、ということらしいとわかる。国会と憲法裁判所など社会制度をつぶさに見聞するというのがメインであった。難民問題が世界的に話題になる中、どうやって治安を保ち、また武器も軍隊も持たないで地続きの統治をやっているのか、これは”ワニの昼寝”以上に想像を絶するツアーと期待感あふれる。

アメリカにNO！ と言った国

イラク戦争の時、全世界がアメリカに同情支援し、コスタリカでも大統領が支持表明を出した。その時、一人の青年が「平和憲法を持つ国でおかしい」と意見を出し、大統領が支持表明を取りやめた国でもある。そんな事出来るの？いや、何故出来たの？　答えは「裁判制度」にあった。
365 日、24 時間開設。日本のコンビニ並みの「憲法裁判所」がある。お金がなくとも、紙（様式、弁護士いらず）に書いて提出する。コスタリカでは、「愛される権利」＝人権という憲法を子どもに教える。例えば、校長先生が校庭に車を止めて遊ぶ権利を侵害してると憲法裁判所に訴えた。最高裁の判決は、校庭は子どもたちが好きなだけ遊ぶ場所と定義し、校長に車をどかすよう命じたそう。日本なら、グチグチ陰で言いながら、校長の転勤を待っている構図。
さて、ピースボートで友達になったというオットーさんは今や国会議員となり、新しい＜市民行動党＞という現大統領を生み出す政党の党首であり、日本の九条の運動を知って議会に提案してくれたきっかけを作ってくれた人だ。そのオットーさんと国会議長さんと和たちとの懇談があり、感謝のタペストリーを渡すという感激的な瞬間にも立ち会えた。平和憲法を実践する国と、平和を望み、そういう日本を希求する運動体との確かな出会い

の場面は、歴史を進める大きな一歩の場に自分が立っていると実感できた。
その後、国会の議場を見学。「コ」の字型の議場を真ん中に、両側に国民と記者室とガラス張りになっており、その議場で審議が行われる設計になっている。まさに＜ガラス張り＞。国民側のガラスは怒りの爆発でひび割れが入っている。間違いなく、ラテンの血。議員はコーヒーブレイクの隠れ部屋があり、そこを使用した際は、日当から差し引かれる。うーん。これでは寝るなんて出来ない緊張感。

長期政権は必ず腐る！

大統領になったら、４年間で終わり。８年間は選挙に出られない。これは、２国間の紛争を話し合いで解決し、平和ノーベル賞をもらった大統領が長期政権を提案した時に、＜腐るにちがいない＞と新たに決められたとか。長期の権力の座は腐敗の温床になる、と徹底した民主的選挙制度を作り上げて来たのだ。
難民との共存は？
ある日、突然、トタンで囲った町が出現、という事態も。しかし、子どもがいれば、学校を作り、教師を派遣する。教育も医療も無料。憲法にうたっているのだ。「国民と同じ権利を持つ」と。建物は立派ではない。２部制だったり３部制だったり。しかし、給食があり、学校の長期休みで食べられない子が居る場合は給食だけ保障するというのだ。これは教育予算でなく、福祉予算なのだそう。難民は３年で、普通の人は５年いたら国籍がとれるそう。
総じてすべての毎日に「憲法」があり、それが地域、日常で検証されている国。これがコスタリカ。戦争がないというだけで平和だ、という事ではなく、個人が健康で幸せであること、このためにどうするか、が原点の国。コスタリカの金八先生（難民地域で小学校の教師を十数年やって、今はその地域の幼稚園の園長先生）は言う。
まず一人一人の国民が平和に暮らしていると感じられてこそ、社会も国も世界も平和である。と。人間もワニも、＜平和＞に住もうという国がコスタリカだ。

軍隊を持たず、本物の＜積極的平和主義＞

今や、アメリカを世界一の軍隊を持つ国にしようというトランプとアメリカに忠誠を誓う安倍内閣と、先の動きが見えない北朝鮮と、軍拡一途の世界関係が出来上がりつつある。選挙で一度多数を占めれば、何でも出来ると、好き放題にしている現実。自浄作用を持たないこの日本国の今後を考えると、明日は今日より良くなる、と本気で思っていた私たち団塊世代のようなノンキさで今後を推し量ることは出来ない。安倍晋三は特に、教育を変えることに目をつけ、徹底した２０年先までのことを見越した（話題の「安倍晋三記念小学校」しかり）やり方を実践していることが図らずも、政治家が便宜を計ったところから陽の目にさらされた。
まさに驚愕の幼児教育が実施されていた。子どもは言われるままに、「教育勅語」を暗唱する。あの学校に通わせる親がおり、安倍の名で寄付は４億円も集まったらしい。憲法改正（悪）の署名を７００万集めたという年明けの新聞記事の内実がやっとわかってきた。大した財産も稼ぎもない我々庶民（草民）はどうやって子ども、孫を育てたらいいのか、ここで智恵を絞らなければ、ちゃんとした主権者意識を持つ子ども＝未来は望めない。
平和憲法を持ち、軍隊を実際に持たないコスタリカ。一方で平和憲法を持ちながら、軍隊を持ち、軍拡に走る日本。
この時期に、コスタリカを知ったこと、まさに、この平和連帯の精神を次世代にも受け継がせる責務があるのではないか、と日が経ち、時が過ぎ、ニュースを見て頻繁に思う。そうだ！　コスタリカを孫たち世代１０歳～１８歳までに見せよう。
身体で、目で、耳で、同世代の子どもたちから説明してもらい、未来の主権者たち自身で、この日本をどうしたらいいか自分の頭で考える機会を創ればいい！
外国にこれだけ行っているのに、買い物だの遺跡だので終わるツアーでなく、社会シス

テムを学び、未来の「国」を造る意識あふれるヒントをもらうツアーはコスタリカに限る。「国連平和大学院」を誘致し、その大学院で、難民の子ども教育も一緒に考えてやっているということもわかった。今回のツアーにも、日本の現役の学生が同行して、有意義な時間を過ごした事も、素敵な事だった。つまり、本物の＜積極的平和主義＞を実践している国なのだ。

教育に力を入れ、民主主義、人権を子ども時代から徹底をはかることで、「平和」を子どもの心と体にしみ込ませて民主主義を醸造してきた先進国と言っていい。

友人に話す。孫がまだ小さい。お金がない。そう思っていてもなかなか大変だとわかる。ならば、未来の主体的主権者を育てる何か、財産管理まで出来る組織体を作りスタディ・ツアーを毎年やるようにすればいい。教育勅語を暗唱させる教育に対峙できるスタディ・ツアーを組もう。しかも、コスタリカはワニの昼寝も、ナマケモノの木にぶらさがってる姿も、イグアナもそこいらへんにいる。

日本に出没したら「きゃー、気持ちわるぅ」と悲鳴があがる希少生物が「可愛い！」と感嘆の声に変わる日常風景があるというエコ・ツーリズム発祥の地。社会システムと同時にジャングルや自然体験ができる国であり、すべての生き物と共存する国なのだ。子どもたちの喜ぶ動物園そのものの中に、人間がお邪魔します、とおじぎしたくなる国がコスタリカ。

経済は後進国でも、環境は先進国。

エネルギーも。裁判制度も。選挙制度も。積極的平和も。人心も。そして、水さえ蛇口から飲める。案内役は、コスタリカの子どもたちだ。

コスタリカの子どもたちは先進国の子どもたちを知り、日本の子どもは、遠く離れた小さな国の貧しくとも人権が保障された国になる努力を続ける日々の成り立ちを知る。これこそ、”平和ノーベル賞”に匹敵する未来を創るムーブメントではないだろうか？！
昔々「幸福の木」という観葉植物が流行った。あの木を日本に流行らしたのがコスタリカ。自分は幸せだ、と思う子どもたちが、根を張り枝を伸ばせる日本になっていく・・・未来の主権者を育てる種子を撒きたい、撒かねば、と思い募る。

1949 年、コスタリカが平和憲法を定め、実践してきた年に生まれた自分の＜偶然の必然さ＞をかみ締めるコスタリカとの出会いになった旅でした。

（ちだ・ゆうこ：33 歳～45 歳まで松戸市議。労働者協同組合センター事業団を礎になり、その後、重度知的障がい者生活ホーム運営、福祉関係ボランティアを経て 2016 年＜NPO 法人あらぐさ＞を設立。現在は地域活動支援センターⅢと障がい者の余暇支援などを実践）

1 期やったら 8 年間選挙に出られないため、壁一面に多くの大統領経験者の顔写真があふれていた。千田さんは、正面男性（伊藤千尋氏）の右後ろの女性

＜解説：本稿は、2017 年４月発行の日中科学技術文化センターの会報「きずな」に、提案と題して書かれたものである。この原稿を読まれた事務局参与の牧野八郎氏からぜひ、本誌に転載すべきと進言があり、凌星光氏の了解の下に掲載する＞

大平外交哲学と対中国友好精神の復活

凌　星光

岸田文雄外相が昨年 5 月に訪中した際、李克強首相が大平正芳元首相を称賛する場面があったと報道された。(宏池会武井俊輔、小林史明両議員同行、5 月 7 日付日経) それは 1980 年代の日中関係黄金時代への回帰を期待したものであり、大平政治哲学とその対中国外交を想い起し、当面の日中関係の改善に資したい。

故大平首相は 1979 年 12 月 7 日、北京で「新世紀に向けての日中関係」と題して格調の高い講演を行った。場所は中国人民政治協商会議講堂で、聴講者は 1100 人余、その模様は全国に放送・放映された。講演の要点は以下の通りである。

先ず、21 世紀に向けての「世界の中の日中関係」を提起した。二つの政治文書（日中共同声明と平和友好条約）の原則と精神に基づいて「よき隣国として、平和友好の関係を長期にわたって維持・発展させ」「８０年代ばかりでなく、２１世紀に向けて、あらゆる面で両国間の良好且つ安定的な関係を発展させ」「日中関係をアジアと世界の平和と安定に貢献する関係に発展させるべきである」と述べた。

次に国際社会における責任分担としての対中協力を提起した。相互依存関係が高まっている中、「すべての国が助け合い、進んで責任を分担して、はじめて世界の平和と進歩が確保される」とし、将来、「中国も国際社会の平和と安定により一層積極的な役割を果たす」ことを信じると述べた。

第三に中国現代化の基礎作りに協力―円借款の提供を示した。日本は、中国の現代化実現への努力に積極的協力していくことを保証し、「港湾、鉄道、水力発電所など幾つかの基本建設プロジェクトに使うための政府借款を提供し」、更に文化学術面や人材養成でも協力していき、それが「21 世紀に向けて建設を行う基礎となることを心から願っている」と述べた。

第四に大平三原則を提示した。即ち、（１）「如何なる国とも軍事的協力はしない。」（２）中国以外の近隣アジア諸国、とりわけ「ASEAN 諸国との協力を積極的に推進する。」３）「日中関係は排他的ではなく」「中国市場独占のためではない。」中国と「秩序ある関係を打ち立てる」と言っており、念頭にあったのは東アジア経済共同体の構築であろう。

第五に国民同士の信頼関係確立が基本であると強調した。「国と国との関係で最も重要なのは、双方の国民の心と心の間に固い信頼が形成されることであり」、日中間の相違点をよく自覚し、「一時的な雰囲気や情緒的な近親感だけで、或いは経済的な利害関係のそろばんだけ」で考えるならば、「砂上の楼閣のようにはかない脆弱な関係になってしまう」と戒めている。

最後に、「相互信頼」を大切にし、「嵐と大波」に耐える心構えを提示した。「２１世紀に向かうこれからの時代において、非常に多くの嵐と大波に襲われるであろう」と予言し、「両国の意思が異なり、利害関係が異なる局面が現れた」場合、「相互信頼」を失わず、「長期的な両国の平和友好関係」を維持し、「子孫たちがそれを誇りに思う」よう努力しようと呼び掛けている。

大平正芳元首相は中国の有識者から最も尊敬されている日本の現代政治家である。鄧小平氏は大平元首相を高く評価し、1979 年 12 月の北京での会談に深く感謝している。大平氏の所得倍増計画の経験談と中国経済発展のグランドデザインについての質問によって啓発され、2000 年末までに小康状態（一人当たり GDP が 800-1000 ドル）実現の発想が生まれ、更に三段階戦略論に発展させたという経緯があったからである。

大平首相は 1980 年 6 月 12 日、突然亡くなられた。その翌々日、鄧小平は日本大使館へ自ら足を運び弔問に赴いている。また、9 月 4 日、鄧小平は伊東正義外相と会った際、「大平氏が亡くなり、中国はよき友人を失った一一中国人民は彼の名を忘れない」と語った。1984 年に中曽根康弘総理、1988 年に竹下登総理と会見した際にも、大平氏氏を偲び、感謝の意を述べている。

大平元首相と中国との付き合いはそう長くはない。しかし、多くの中国指導者及び有識者の信頼と尊敬を得たのは何故であろうか。それは大平元首相の誠実な人柄と「大平哲学」に基づく知見にあった。

大蔵省の役人であったころの勤務態度は「自慢しない、愚痴をこぼさない、他人の悪口を言わない」人徳者であったと言われる。その誠意ある態度は各方面から評価されている。共産党の不破哲三氏は「大平幹事長はなかなか信頼できる協議相手」、「難しい問題でも議論を尽くして結論が出るときちっと回答を出す」、「回答を出したら、確実に実行していく」と評価する。ライシャワー米駐日大使も大平外相（当時）を評価し「自民党の政治家の中には親米的な人は非常に多いけれども大平さんが最も親米的だったんじゃないか」と述べている。

大平元首相の哲学は「対立を止揚する全体、分裂を克服する統一、闘争を超えた調和」を求めた和諧論者であった。二つの焦点によって描かれる楕円を例にとって、二つの中心の均衡を図ろうとする「楕円の哲学」を説いた。資本主義が頽廃し、資本主義と共産主義が激しく対立する中、近代産業社会を超えて協調する政治観・世界観を確立しようとしたのである。

思想的には、近代になって「西洋思想と東洋思想という二つの思想的潮流の渦中に投げ込まれて、右往左往してきた日本」、「戦後はより多く西洋思想の側に揺れ動いてきた」が、今や「真に日本的なもの」を経済、政治、文化各方面において発掘しなくてはならないと説く。それは「戦前への回帰」ではなく、「模倣的発展」から「創造的発展への転換」を図ることだという。

政治的態度は、戦後、国民に定着している民主主義意識、平和感覚を尊重し、日本国憲法に表現された諸価値観を本格的に定着させよう、改憲を求めず、経済を中心に据え、権力の行使を控え、コンセンサスの政治を追求するというものであった。1972 年には「戦後の総決算」を標榜し、四つの政策、即ち「（1）政治不信の解消、（2）人間的連帯の回復、（3）自主平和外交の精力的展開、（4）田園都市国家の建設である」を提起した。1978 年 12 月、政権の座に就くと 9 つの政策研究グループをつくり、日本の進むべき 21 世紀のビジョンを示し、「信頼と合意」をモットーに「和の政治」を進めようとした。

外交姿勢については、（1）「外交は本来、自主外交に決まっているが」、外交に主体性を確立するにあたっては「自分の力量や寸法」を見極める必要がある、（2）国益を守る外交は「遠い展望に立って」展開すべきである、（3）外交の基本を内政との一体化におくべきであると説く。日本の安全保障については、日米安保の維持を基本としつつも、非軍事的要素も重視した。即ち国内政治と経済の安定を図り、それを踏まえて対外経済協力関係を深めていくことが安全保障につながるという考えだ。また国連を重視し、国連の平和維持活動には積極的に参加し、将来、国連軍ができた場合は、国連主体の武力行使による紛争解決に前向きに検討すべきであると主張する。

対中国外交については、早くも 1960 年代に日中貿易の必要性を説き、アメリカと台湾を説得した。その成果は池田首相を扶けて実現した LT 貿易に見られる。1964 年には国会で「北京が世界の祝福を受けて国連に迎えられるようになれば、日本としても北京との国交正常化をはかるべきである」と述べた。根底には「日中両国は古くから一衣帯水の隣国であり、未来永劫にそうである。好むと好まざるにかかわらず、相互に分別を持って、平和な付き合いをしなければならない間柄である」という基本認識があった。

盟友田中角栄が首相になると、「内政は田中、外交は大平」との申し合わせによって、二人三脚の協力体制で日中国交正常化に取り組んだ。幾多の困難を克服し、日中共同声明にこぎつけた。台湾との関係を巡る問題処理の手腕は中国側に高く評価された。その後、福田赳夫政権の下で、日中平和友好条約が締結され、その後を継いだ大平政権は冒頭に述べたように、高い次元に立って、日中友好関係の基礎を固められたのである。

日中関係は今、大変困難な状況にある。民主党政権の下では、尖閣諸島を巡る領土問題だけが懸案であったが、今や歴史認識問題、南シナ海問題及び台湾問題が加わった。中国側から見れば、何れも四つの政治文書に相反するものである。日本側には、大平元首相の外交哲学と対中国姿勢を学び、中国側の信頼を取り戻すことが強く求められる。中国側には日本の世論が友好的な方向に変わるよう配慮した対日外交姿勢が求められよう。

2017 年 3 月 13 日

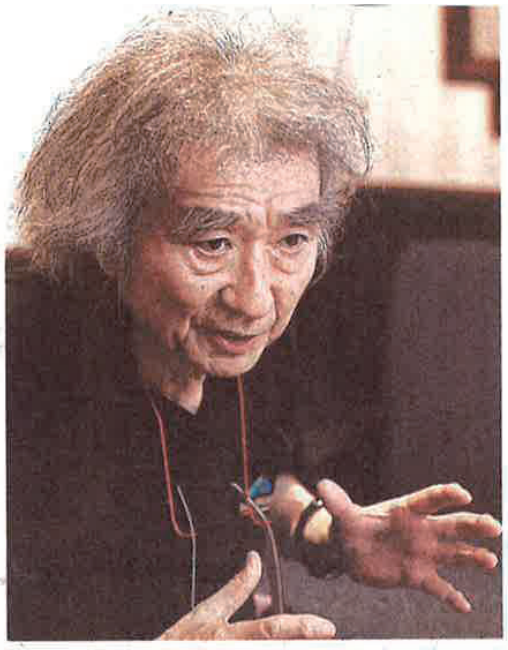
（りょう・せいこう：1933 年東京生まれ。静岡県で高校まで過ごし 1953 年、一橋大学を中退、新中国建設のために帰国。中国社会科学院での研究生活を終え、88 年より日本で研究及び執筆活動。福井県立大学名誉教授。新著に『21 世紀の日中関係の在り方』がある）

小澤征爾発言の普遍性

日中科学技術文化センターの会報「きすな」の編集後記に２度ほど、この小澤征爾のインタビュー記事の発言を援用している。これもまた、凌星光論文と同じように、小生が書いた編集後記を見た参与の牧野八郎氏が転載すべきと言われた。この記事が掲載された当初、私が事務局を務める日中関係研究所（凌星光所長、谷口誠会長）の錚々たるメンバーに BCC で配信したところ、何人かから、いい記事だ、感激したという返信をもらった。

日中関係といっても大事なのは、民衆レベルの個人と個人の関係である。国家間の関係はその時々の現実政治や国際関係に左右されがちである。そんな政府レベルの時局的な動向に一喜一憂することなく、日中関係を考えたい。その意味でも、小澤氏の発言は素晴らしい。さすが世界のマエストロだと益々、小澤ファンになる。ＰＤＦで残しておいてあったので、やや記事の色合いは悪いがご寛容のほどを。（大類）

2013 年 9 月 19 日付、朝日新聞朝刊一面の記事（次頁は社会面に掲載された）



日中関係や戦争体験について語る小澤征爾さん＝池永牧子撮影

日中関係「大事なのは一人ひとり」

小澤征爾さん 語る

世界的指揮者の小澤征爾さん(78)が、朝日新聞の取材に応じた。満州事変が始まって、18日で82年になるのを前に、緊張が続く日中関係や、戦争体験に根ざす平和への思いを語った。

小澤さんは旧満州（中国東北部）で生まれた。２０１０年に食道がんを手術。長期休養もあったが、今月7日まで長野県松本市で開かれたサイトウ・キネン・フェスティバル松本で、完全復活を印象づけた。

「冷え込んでいるのは、日中政府間の関係。大事なのは一人ひとりの関係で、ぼくは、中国にいる友人たちを信じている」

39面に続く

小澤さん「日中？俺は全然冷え込んでない」

1面から続く

黒いポロシャツに、ピンクのシャツをはおった小澤征爾さん(78)。「写真はいつでもどうぞ。もう厚化粧してますから」とおどけてみせた。サイトウ・キネン・フェスの公演後ほどなく、行きつけという東京・成城の喫茶店で話を聞いた。

今、日中関係は冷え込んでいますが。そう問いかけると、「あなた今、冷え込んだって言ってるけどね。それは政府の人が冷え込んだんだよ」と答えた。

「俺なんか全然冷え込んでないよ。全然冷え込んでない。全然冷え込んでない。そんな軽いもんじゃないよ。人生は」。冷え込んでない、を3回繰り返した。

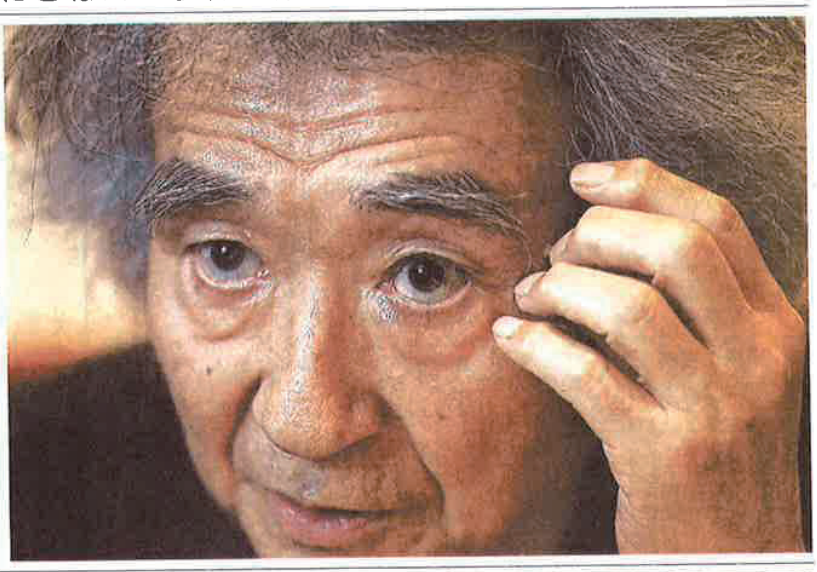
「人間生きていくときにね、俺の政府と、お前の政府との仲が冷え込んでいるからって俺には何の関係もないよ。不便になるかもしれないけど、全然関係ない」「ぼくはまったく心配してない。中国にいる僕の仲間だって心配してないと思う。どこ行ったって関係ないよ、それは」

小澤さんは、満州事変の発生から4年後の奉天（現・中国の瀋陽市）で生まれた。北京に移り、1941年に6歳で日本に引き揚げた。帰ったばかりのころは、けんかするとすぐ中国語が出て、ばかにされた。「頭に来て、中国語をしゃべらなくなっちゃった」

父の存在が支え

父の開作さんは満州事変の前に、歯科医として旧満州に渡った。その後、「五族協和」を唱えて結成された「満州青年連盟」の幹部となった。五族協和は漢、満州、モンゴル、朝鮮、日本の5民族が仲良くやろうという理念。日本がつくった傀儡国家「満州国」のスローガンだが、開作さんは愚直に取り組み、中国人と仲良くなりすぎて、憲兵にらまれた。

戦争を経て、開作さんの平和主義者の側面は強まった。ベトナム戦争さなかの67年ごろ、当時カナダ・トロントで音楽監督をしていた小澤さんに開作さんは「ロバート・ケネディ（ケネディ元米大統領の弟）に会わせろ」と頼んだ。ってをたどって米ワシントンでケネディ氏に会った開作さんは「東洋人同士の戦争はもうやめさせないとだめだ」と直訴した。70年に72歳で亡くなったが、父の存在は、小澤さんの平和への思いを支えている。



原点は空襲体験

平和を願う原点としての体験は、引き揚げ後、終戦まで過ごした東京・立川で遭った空襲にある。45年春ごろ、自宅近くの桑畑で弟と遊んでいた。空襲警報が鳴り、戦闘機が向かってくる。「機銃掃射って言うの？　ダカダカダカダカーッて撃つのよ。向こうはね、恐らくふざけてやっていた気がするな。桑畑なんて撃つ必要ないんだから」。防空壕に逃げたいのに、恐怖で体が動かない。「操縦士の顔が見えたような気がしたの。それくらい低く降りてきたの。びゃーって」

同級生の自宅は直撃弾に襲われ、一家3人は即死した。迎撃された米軍の爆撃機B29から落下傘で降りてきた米兵が、撃たれて殺されるのも目撃した。死んだ米兵を見に行く人がいた。

「戦争はほんっとうにめちゃくちゃだと思った」

1979年12月に訪中した際、中国中央楽団のメンバーを指導する小澤さん＝北京

楽団指揮の約束

中国語こそ忘れたが、戦後も、小澤さんと中国との交流は続いた。

初の訪中は76年末。当時は文化大革命の影響で、西洋音楽の演奏はほとんど出来なかった。「今度帰ってくる時は指揮したい」と中国側と約束。2年後に北京で中国中央楽団を指揮した。国交正常化30周年では新日本フィルの指揮者として北京の舞台に。2002年に母さくらさんが94歳で亡くなると、遺骨の一部を北京の旧居の中庭に埋めた。「おふくろが植えた木があるのね。その下にみんなで、セレモニーしてもらって埋めたんですよ」

取材予定の時間が、20分以上過ぎていた。最後にもう一度、今の日中関係について聞いてみた。「政治的なことはよくわからないけど、一人ひとりがもうちょっと、ちゃんと考えるべきだよ。政府がどう言ったからだとか、新聞が書いているから、とかじゃなくて。大事なのは一人ひとり。政府よりも、政府じゃない普通のひとがどう考えるかが一番大事。僕はそう思う」。ぐっと顔が近づき、その目はまっすぐ私に向けられていた。

（今村優莉、写真は池永牧子）

朝日新聞　2017年2月5日付朝刊より転載

中国残留の91歳 決意の帰郷

現地に家族 悩んだ末

三男の郝宝勝さん（左）と話す桂川きみさん＝東京都江東区

昨年11月、岐阜県下呂町（現下呂市）出身の中国残留婦人＝🔑＝、桂川きみさん（91）が三男夫妻を連れ、中国安徽省から祖国・日本に永住帰国した。90歳を超えての永住帰国は珍しい。桂川さんは「やっぱり日本はいいですね」と満面の笑みを見せた。

桂川さん一家は昨年11月30日に帰国した。現在、東京都内の公団住宅の一室に暮らす。半年間、三男の郝宝勝（ハオバオション）さん（59）夫妻が日本語や習慣を学び、その後、身元引受人がいる神奈川県内で生活する予定だ。

桂川さんは8人きょうだいの末っ子。17歳のとき父母らと開拓団員として中国東北部（旧満州）の琿春に渡った。

米や野菜を作る日々は、1945年8月の旧ソ連軍の侵攻と日本の敗戦で一変。朝鮮半島に避難したが、途中で父母らと離散した。

「ソ連兵が来て、それは恐ろしかったですよ」と桂川さん。逃げ惑って転々とし、中国側の延吉にたどりついた。生きるために炭鉱でご飯炊きをした。そんな中で知り合った車の修理技術者で7歳年上の中国人男性と結婚した。

夫の転勤で移り住んだ安徽省で1女3男を育てた。78年、故郷と連絡がとれ、翌79年に一時帰国。戦争中にフィリピンに出征していた兄のもとに1年、身を寄せた。

両親は、朝鮮半島で死亡、姉2人は中国から帰国していた。桂川さんは残してきた家族を思い、中国へ。85年にも半年、一時帰国した。

永住したい気持ちをずっと持っていたが、永住となれば子どもと離ればなれになる。2002年の夫の病死後も悩み続けた。それでも人生の最期は祖国で、と15年に日本政府に申請した。郝さんも快諾した。

桂川さんは帰国前に転んでひざを痛め、外に出かけるときは車いすだが、日中は毎日200㍍歩く練習をする。テレビで大相撲や駅伝を見るのが大好きだ。

「日本人はとてもきれいで好きでいいですね。天気もそんなに寒くなくて。私の気持ちも晴れます」

郝さんは「母は非常に苦労したと思う。できる限り孝行したい」と語る。中国でレストランを開いていた郝さん夫妻はいま日本語を特訓中。中華料理店を開きたいと考えている。

中国残留婦人

戦前から戦中にかけて中国東北部（旧満州）などに渡り、敗戦前後の混乱の中、家族を養うため、あるいは生きるために中国人男性と結婚するなどして中国に残った、敗戦当時13歳以上の女性たち。政府は「自分の意思で残った」とし、敗戦当時12歳以下で、親らと生き別れた中国残留日本人孤児に比べて当初は支援が手薄だったが、1994年にできた中国残留邦人支援法で、希望すれば永住帰国できるようになった。厚生労働省によると、永住帰国した残留婦人らは416人、残留孤児は2556人。中国で暮らす婦人は27人、孤児は261人（いずれも17年1月末現在）。

生活習慣学ぶ施設 1室に

国費で永住帰国した中国残留邦人（残留婦人と残留孤児）は2015年度まで、最初の6カ月は埼玉県所沢市の中国帰国者定着促進センターに入り、日本語や生活習慣を学んだ。センターでは計1802世帯6644人が生活したが、ここ数年は帰国する残留邦人が減り、昨年3月末で閉鎖した。

そのため、厚生労働省は16年度から東京都内の公団住宅の1室を永住直後の入所施設としている。桂川さんは入所第1号だ。

厚労省によると、現在、永住帰国を待つ残留邦人は4人ほどいるという。しかし、施設は1室。2年待ちの人も出てくる。

NPO法人「中国帰国者・日中友好の会」理事長で、自らも孤児だった池田澄江さん（72）は「高齢化は進んでいる。待っている間に亡くなったらどうするのか」と訴える。

（編集委員・大久保真紀）

河合弘之さんは有能な弁護士である一方、中国残留孤児の国籍取得を支援する活動を長く取り組まれ、また脱原発運動の代表的な存在である。2012 年 6 月の当会の総会では、「残留孤児及び原発問題を通して日本を問う」という題で記念講演もしていただいた。（大類）

東京新聞 2017 年 3 月 5 日付朝刊より転載

My Family 家族のこと話そう

父母のおかげで命拾い

弁護士　河合弘之さん

父は京都大経済学部を出て、「一旗揚げてやる」と当時の満州（現中国東北部）に渡りました。旧満州国がつくった電力会社に入り、日本軍の軍医の娘と結婚。私は三人目でやっと生まれた待望の男の子だったので、とてもかわいがられました。

戦中は恵まれた生活で、社宅には当時は相当に珍しかった冷蔵庫もあったそうです。しかし、それは終戦で一変。父が家財道具を売ったり、近くの池でザリガニを捕ったりして、なんとか食いつないだ。旧ソ連が攻めてきたときに略奪に遭ったという話も聞きました。家を閉め切って外に出られず、太陽に当たらなかったり、栄養不足だったりで私が一歳のころ、病気になった。そのときも医者に行けず、O脚のように脚が曲がった。私が小柄なのは、そのためだと思っています。

日本人の中には、寒くて食べ物もなく餓死したり、死ぬくらいならと、わが子を中国人に託したりする人もいた。それが中国残留孤児。死と隣り合わせの生活です。

私は二回命拾いしています。一回目は終戦直前のころ。父たち大人の男が軍から公園に呼び出されて、「第一乙以上は前に出ろ」と言われた。一定の体格以上の人のことで、他の人は前に出たそうですが、父は嫌な予感がして動かなかった。前に出た人たちは召集され、終戦後にシベリアに連行されたと聞きます。もし父が正直に前に出ていたら、母は一人で私と二人の姉、一歳下の弟の幼子四人を抱えて戦後の混乱を生き抜かなくてはならなかった。私は死ぬか、残留孤児になるかしていたでしょう。

もう一回は、終戦の一年後。日本への引き揚げです。二歳だった私は母に抱っこされていましたが、船が出る港までは大変な道のり。私たちは栄養失調になり、弟は途中で亡くなりました。「弘之は何が何でも生きて連れて帰る」と母が死ぬ気で守ってくれました。ようやく日本の父の実家にたどり着き、医者に行くと「あと一日遅ければ死んでいた」と言われたそうです。

自分は幸運だった。自分は孤児になっていたかもしれないという思いから、一九八四年に「中国残留孤児の国籍取得を支援する会」をつくり、約千二百五十人の日本国籍を取りました。

何か人のためになることを、という思いは常にあります。いま心血を注いでいる原発の運転差し止め訴訟は、人間にとって最も根源的なことは何かと考えてのことです。つまり、後世にいまの地球を残すこと。環境が一番大切だと思ってのこと。

父と母は、決して権力におもねらない人でした。権力が悪いことをしていたら、声を上げる。その考え方は、私にも伝染していると思います。

聞き手　河野　紀子
写　真　由木　直子

かわい・ひろゆき　1944年、旧満州（現中国東北部）生まれ。東京大在学中に司法試験に合格。20年前から原発の運転差し止め訴訟に関わり、東日本大震災発生後に結成した「脱原発弁護団全国連絡会」の共同代表を務める。製作・監督した原発のドキュメンタリー映画「日本と再生」が東京で公開中。

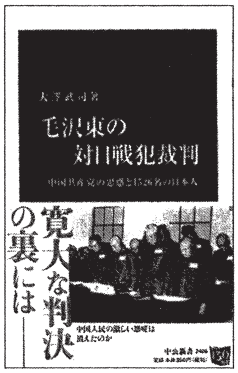
『毛沢東の対日戦犯裁判』の書評と「わんりぃ」について

「わんりぃ」という冊子を知ったのは 2012 年の１年間、『日本と中国』紙の編集長をしていた頃である。その折り「甘粕正彦と大杉栄」というタイトルで原稿を書いた。その後、代表の田井光枝さんは『星火方正』16 号の拙文「国際主義を超えて HOMARANISMO を！―K・マルクスから L・ザメンホフの人類人主義へ―」を読まれ、小生にエスペラントについて書いてほしいと言われた。そして昨 2016 年３月から毎号、＜混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ！」を連載している。＜友好訪問＞はそのような縁から編集部から依頼された。また次頁の澤岡泰子さんも本当に縁のある方だと思っているが、ご縁の経緯は長くなるので別の機会にしよう。（大類）

"日本と中国"を読む

毛沢東の対日戦犯裁判

中国共産党の思惑と1526名の日本人　　大澤武司〈著〉



中公新書
860円（税別）

対日戦略の結節点に迫る

「撫順の奇蹟」とも呼ばれ、撫順戦犯管理所に収容された１００人近い日本人戦犯が、自分たちの罪状を認め「鬼から人間へ」変貌し、中国政府の寛大な処置で無罪釈放された歴史を知る人は決して多くはない。この撫順戦犯管理所での戦犯と、国民党・閻錫山将軍の下に投降し、共に八路軍に対峙した日本軍人たちが収容された太原戦犯管理所、また河北省易県の西陵農場で「労働改造」を施されていた日本人戦犯たちなど、計１５２６人の日本軍人たちがいかにして「戦犯」とされ、「認罪」というプロセスを経て、自分たちの犯罪事実を認識するように至ったのか。また彼らに対して「寛大な処置」を下した毛沢東の戦略がいかに実行されていったのか。本書は中国共産党内部の葛藤を含めて詳細に検証し、その全貌に迫っている。

当時の中国政府の「寛大な対応」後、２００５年には日本人戦犯の自筆供述書が全10巻の資料集として刊行され、また14年には英訳されネットで公開されたという。「奇蹟」はいつでも政治的に利用されかねないのだ。

本書は、量刑を巡って極刑を科すべきという声や「人民の義憤」の中で、日本との友好を戦略的に視野に入れた周恩来らの対応を含めて、戦後の日中関係の核心に迫っている。収容所の現場で働く中国側管理者たちの、戦犯たちへの個人的な恨みや憎悪を超えて対応した事実を改めて知ることは、不協和音が流れる日中関係の今日、極めて重要であろう。

（大類善啓）

友好訪問

自分たちが楽しんできたからここまでやってこられたんです

交流活動誌で「日中学院倉石賞」を受賞

日中文化交流市民サークル
‘わんりぃ’代表

田井光枝（たいみつえ）さん

＜プロフィール＞

1935年東京の深川生まれ。戦争中は水戸郊外の母方の実家に疎開。お茶ノ水女子大学教育学科を卒業後、日米会話学院で英会話を学び、国際会議の事務局などを手伝う。28歳で結婚し4人の子供を育てる。中国雲南省の少数民族の服飾文化に出会い中国文化に興味を持ち、日中文化交流市民サークル‘わんりぃ’をPTA仲間と立ち上げ、現在に至る

‘わんりぃ’といっても知る人ぞ知る、という感じではないか。受賞の件でインタビューを申し入れたところ、「賞をくれるなら、10年前にほしかったわ。こんな年寄りになってからなんて」と、ユーモアたっぷりの答え。会えば、なんだか童女のような若々しい感じなのである。

留学生たちに活動の場

「ちょうど天安門事件の後、1990年代の初めですね。京劇の俳優さんや中国民族音楽の演奏者、絵描きさんたちなど、芸術を志した中国の若者がバブル期の日本に自分の未来を託して大勢来られたけど、なかなか居場所がなかったんです。そんな人たちに、長い間学んだものを発表する機会を作ろう」と主婦業の傍ら仲間と始めたのが中国語講座や気功太極拳講座、京劇講座だった。

「3つの講座の連絡のための会報の必要が生じました」。答えはいたってシンプルだが、始めるとエネルギッシュに活動するタイプ。東京は深川生まれの気っ風の良さ。「塀から飛び降りろと言われれば飛び降りちゃう下町娘」だったという。

92年、会報は「会のおたより」として出発したが、京劇鑑賞会や中国民族演奏会、展覧会などの開催で地元の町田市鶴川に留まらない活動の広がりから、98年に会報の名前を「わんりぃ」に変更した。‘わんりぃ’とは「万里の長城」の万里の中国語読みである。

2月と8月は休みだが、それ以外は毎月発行し部数も350部ほど出している。会員は現在79人。原稿から印刷、発送まですべて会員の手作りで、今年の新年号で220号になった。

内容は、北京や大連、長春、フィリピン、スリランカなどの旅のエッセイや滞在記。論語や漢詩、東西文明の比較、中国の笑い話、〈お母さんの愛を味わう 中国おやきの会〉という名の料理の会やコンサート、写真展など、会員たちの活動報告が満載だ。中国関係の展示会などの告知記事も載っていて、なんだか頁を繰るだけで楽しくなってくる。

遊び心でやってきた！

受賞理由も、地域に根付いた長年の草の根交流にある、と言われるだけあり、在日中国人芸術家や留学生との交流など‘わんりぃ’の会員たちの活動の積み重ねが評価されている。

「なんで続いたかというと、自分たちが楽しんできたからです。何かのために頑張って力を出すとか、という気持ちは全然ないんです。とにかく知らない世界を知ることが楽しくて、その遊び心でやってきました。会員たちも遊ぶのが好きな方たちで、皆で興味あるほうにどんどん突っ走ってきて年数が重なったというのが本当のところですね。日中友好に貢献したなんて気持ちはないし思ってもいない。こんなこと言うと、授賞式で蹴飛ばされるかしら（笑）。最後まで笑いを誘う遊び心は健在だ。

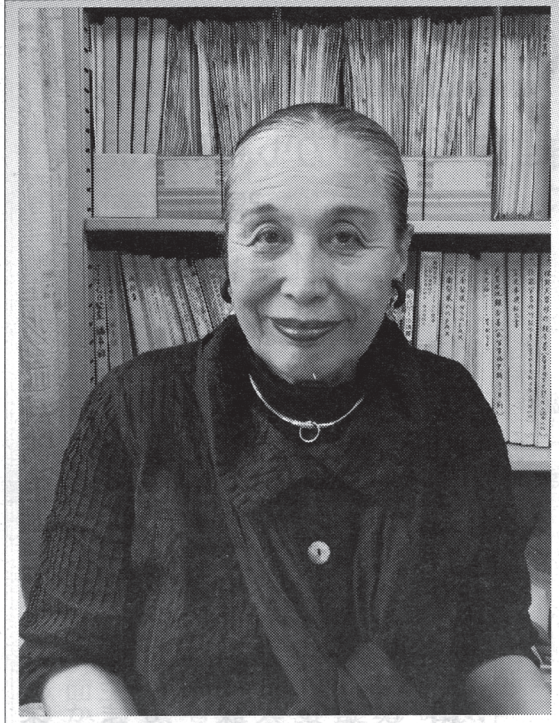
（大類善啓）

友好訪問

日本で考案された〝木リト〟が中国の大地で根付いています

中国人学生に木のリトグラフの魅力を伝える

版画家　**澤岡泰子（さわおかやすこ）さん**



＜プロフィール＞

1939年北海道・札幌生まれ。女子美術大学デザイン科を卒業。日立製作所の中央デザイン研究所に勤務し家庭用電気製品のデザインに従事、その後、パナソニックで最初の女性工業デザイナーとして活躍後に独立。現在は版画家として中国をはじめ世界で活躍

★木石版画「モクリト」展が東京で開催！

[期間] 8月22日～26日　10時半～17時30分（最終日は15時まで）

[会場] 東京中国文化センター（港区虎ノ門3丁目5-1第37森ビル1階

☎03-6402-8168

小学4年から中学2年まで、開放性の肺結核にかかり学校へ行けなかった。部屋にあった枕草子などをひたすら読む一方、たくさんの紙に、ただただいたずら書きをして過ごす。高校の美術部から女子美術大学へ。卒業後は大手企業に就職し商品デザインを担当した。

その後、フリーに転向。絵を書く一方、6畳の部屋でできる金属レリーフを始め、木のリトグラフ（版画の一種）に出会う。「これは面白いと思い、始めました」。「木リト」の始まりだ。その作品の成果は、ポーランドやイタリア、そしてメキシコなどでの展覧会に繋がった。

木リトに驚いた中国の先生たち

澤岡さんの木リト作品は、病院や児童相談所などいろんな所に飾られている。それを見た中国人の化学の先生から「中国で講演してほしい」と言われ2012年3月、広東省潮州市の韓山師範学院美術学部の大教室で講演。100人以上の先生や学生が詰めかけ立錐の余地もなかった。

初めて木リトを見る学生たちからも「どうして木リトが始まったのか」などの質問が殺到。翌年3月には現地で学生たちに教えた。

「中国の学生はものすごく好奇心旺盛で、原宿で何が売られているかなど、たくさん情報を持っている。しかし木リトは知らず、ぜひやりたい」と言う。

そして正味4日間の授業を行った。「学生たちは、刷りとりが非常に良く、足刷りやバレンで作品が作れ、同じ版に絵を描き彫ることもできることなどを理解し、良い木リトを作ることができました」

中国人学生の展覧会開催へ

翌2014年も授業を行った。その時は広州美術大学大学院の卒業生や教員も参加。11年の最初の打ち合わせから3年。「やっと木リトが中国の大地に根付いたことを確信しました」

その後、中国の学生たちの作品は東京や神奈川の画廊、愛媛大学の美術館を巡回。政府レベルの日中関係が今ひとつ進展しない中、ある経済人から「政治家にも経済人にもできないことをアーティストはできる。それも日本で考案された新しい技法だからぜひ頑張ってください」と激励された。

今回、広東省韓山師範学院大学の学生たちの木のリトグラフ展が東京で開催される。学生の作品44点、自身を含む日本人教員らの作品を含めて計60点が展示される。

「中国から伝わった木版画が、日本で考案された新しい技法に出会い生まれた木のリトグラフ〝モクリト〟。それが中国で花開きつつあります。ぜひ多くの日本人に見てほしい」

（大類善啓）

作家・作詩家の、なかにし礼さんが、新作『夜の歌』を出しました。幼少期を過ごした満州（中国東北部）からの過酷な逃避行や、戦後の芸能界などを描きます。波乱の人生の集大成となる長編を書き上げ思うのは…。

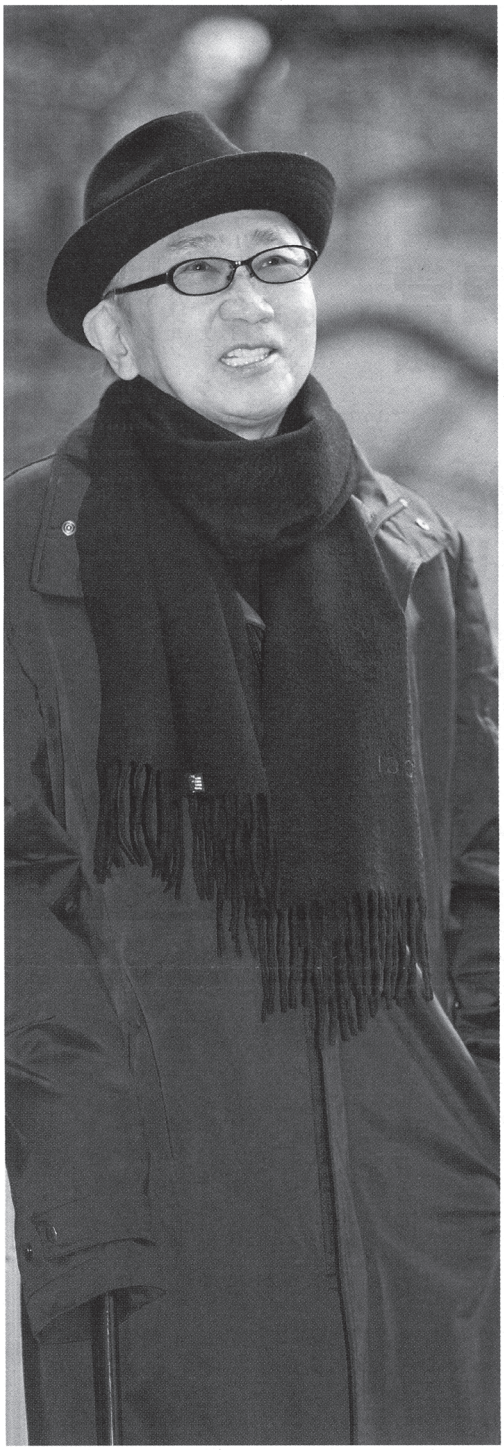
金子徹記者

人生の集大成 最後の小説『夜の歌』

作家・作詩家 **なかにし礼**さん

毎日新聞出版・税別2300円

戦争の狂気語り続ける 僕の使命それしかない



撮影・野間あきら記者

本の帯には「最後の小説」とあります。

「書き始めた時は、がんが再発し危険な状態でした。多分、書ききれないだろうと思っていました。それが、意外な幸運にめぐまれ最後まで書ききることができた。だから最後だと。これからは、エッセーを書くことはあっても、小説はないかな。いや、わからない」ざん新な構成です。

心臓発作で入院した作家で作詩家の「私」の病室にゴースト（亡霊）が登場。人生の岐路を振り返るように、「私」はゴーストと時空を超えた〝旅〟を重ねます。戦争、芸能界、家族の確執と、章ごとに場面が大転換。満州からの避難列車がソ連軍機に機銃掃射されたり、俳優の石原裕次郎さんとの出会いがあったりと、起伏に富んだ話です。

「あまりない書き方でしょう。4層から5層の世界が入り交じっている。これを書くことで、病んでいる肉体を元気付けました。体力がないので少しずつしか書けなかったけれど、書いていると気分が浮き立つ。毎日がルンルン気分でした（笑い）。書きたいことが山ほどあったので、これだけ長くなりました」

多くのページを戦争にあてます。満州で、民間人を差し置き軍人家族優先の軍用列車がいち早く動くなど、リアルです。満州での体験からいえるのは。

〈軍隊というものはいざとなったら真っ先に逃げ出すものである。実のところ国民のことなどなにも考えていないのだ〉

すべて事実

「どこから何をいわれようと、書いたのは全部、事実です。皇軍（天皇の軍隊）は、国民を守るのでなく『国体』（天皇中心の体制）を守るものだったんです」

6歳までは、日本が植民地にしていた満州で「ゆりかごでうたた寝しているような生活を送っていました。しかし、敗戦で生死の境をさまよう逃避行へ。多くの死を目撃しつつ「小さな幸運の連続」で日本に生還しました。

「戦争で、人間の愚かさ、おぞましさを見すぎました。でも、そのなかでもささやかな人間の美点も見た。それが自分にとって、非常に価値のあるものでした。人間の醜悪さをみせつけられ、一言でいえば膨大な暗黒ですが、その中にきらりと光るものもある。なかなかないんだけど、たまにはあるんです」

「権力者は美辞麗句を並べ、国のあるべき姿だとか『愛国心』だとか、世界に貢献するとかいうけれど、戦争になったら失われるのは人間の命です。個人の尊厳とか命は本当に尊いものです。戦争は人間が一番やってはいけないことです」

戦後しばらく、戦争体験を〝封印〟していました。しかし―。

「詩が書けなくて七転八倒していた20代のころ、考えました。自分には、戦争という体験しかない。詩を書くのも、戦争体験から何を紡ぎ出すかだと。それを考えた時、やっと作詩家になれたのでしょう」

新婚旅行先での、裕次郎さんとの出会い（1963年）をきっかけに石原プロと関係。黛ジュンさんの仕事を全面的にまかされヒットメーカーに。日本レコード大賞も受賞しました。そんな驚きの物語の終幕はニルヴァーナ（ねはん）です。

「いまの僕には希望も絶望もない。そんな分かり難い状態を、あえていうなら、絶望という名の希望かな。虚無的になりそうだけど、創作意欲はある。くだらない人間に対する愛情とかがある（笑い）。絶望という名の希望がないと、創作はできません」

憲法の危機

改憲の動きに、強い危機感を抱きます。

「この憲法のおかげで日本は戦後70年間の平和が保たれてきたと思っています。僕は自分の経験を語ることを通じて戦争を語ってきました。戦争になった瞬間、みんなが狂気の顔になったのをみている。それを伝えるために自分を語る。戦争と平和についてはこれからも言い続けていきたい。僕の使命らしい使命はこれしかない」

トランプ大統領と仲良くする危うさ

連日のように世界に波紋を広げるアメリカのトランプ大統領。中東など7カ国の人の入国を禁止した大統領令は、裁判所の決定を受け執行が停止されています。

「アメリカでは三権分立が健全に機能している証明になりました。しかし、トランプ大統領は、新たな大統領令を出そうとしている。自分の考えを、手を替え品を替え、ごり押しするのは、世界的にみても憂慮すべきことです」

トランプ大統領との会談で、安倍晋三首相は〝蜜月ぶり〟を世界にアピールしました。入国禁止令には「コメントを控える」と黙認しています。

「トランプ政権に、どのような閣僚がどう配置され、どんな陣容になるかは、まだはっきりしていません。側近のフリン氏（大統領補佐官）が辞職するなど、混迷している状態です。そういうなかで安倍首相は出かけていって、世界に仲のよさをみせつけた。しかしそれは、世界各国のトランプ評価を考えれば、かえって日本の減点になる可能性がある行為です。トランプ大統領との仲のよさが、国際的には日本のプラスにはならない危険が高いと思います」

なかにし・れい＝1938年中国黒竜江省（旧満州）生まれ。『長崎ぶらぶら節』で直木賞。作詩家として、「北酒場」で日本レコード大賞など受賞多数。『赤い月』『天皇と日本国憲法』『闘う力』ほか多数

東京新聞　2017年4月20日付夕刊より転載

「父母の墓参りしたい」

北朝鮮 残留日本人女性訴え

19日、北朝鮮東部の咸興で日本記者団の取材に応じる、北朝鮮に残留したという女性＝時事

【咸興（ハムフン）（北朝鮮東部）＝時事】第二次大戦後の混乱期に日本に帰国できず、北朝鮮に残留したという女性（八四）が十九日、北朝鮮東部の咸興で日本記者団の取材に応じた。女性は「父母の墓参りをしたい」と語り、日朝関係の改善と早期帰国の実現を訴えた。健康状態は良く、両親の出身地である熊本県で暮らす親戚と手紙のやりとりをしていると話した。

北朝鮮当局が残留日本人の取材を認めるのは異例。拉致、核・ミサイル問題で日本との対立が続く中、残留日本人問題を対話の糸口にする狙いがあるとみられる。

女性は現在のソウル生まれで、「荒井琉璃子」と名乗った。幼い頃、父が働いていた朝鮮半島北東部に住んでいたが、父は一九四四年に出征。戦後、家族が病死したり、生き別れたりしたため、咸興の地元民に引き取られた。現在は、咸興の集合住宅で孫娘とその夫、ひ孫と暮らしている。

取材は自宅で行われ、女性は「日本に帰国したい気持ちはあるが、簡単に行ける状況ではない。朝鮮と日本がこれから近い国になることを願う」と語った。

日本語を話す機会はなく、日本語での意思疎通は困難だという。しかし、記者団が覚えている日本の歌を歌うよう要請すると、童謡「春が来た」の一節を口ずさんだ。

残留日本人の帰国問題は、二〇一四年五月のストックホルム合意で、北朝鮮が調査を行うことになっていた。合意後、北朝鮮が残留日本人とされる人物を公にしたのは今回が初めて。

宋日昊（ソンイルホ）・日朝国交正常化交渉担当大使は十七日、拉致問題について「誰も関心を持っていない」と厳しい態度を示す一方で、残留日本人問題に関しては「人道主義的な観点から対応する」と述べた。

タンゴ歌手・藤沢嵐子と大連

―≪大連体験≫を決して口にしなかった嵐子に思う―

大類善啓

この原稿は、2014 年春に発行された日本タンゴアカデミーの機関誌「Tangolandia」に、≪嵐子よ、安らかに眠れ―「大連体験」を昇華した藤沢嵐子のタンゴに思う―≫というタイトルで掲載したものである。つい最近、タンゴダンスを始めたという人にこの拙文のコピーを送る際読み返したところ、本誌の読者にも興味がある内容ではないかと思った。

大連からは多くの引揚げ者がいて、いろいろ体験談なども書かれているが、藤沢嵐子は、「大連のことを決して口にしなかった」ということも、一つの大連体験の貴重な表現ではないかと思い、本誌の読者に提供してみたかったのである。

当初、少しは本誌のために修正しようかと思ったがその余裕もない。本誌の読者は、本稿がタンゴ研究家や愛好家を対象にする機関誌に、今から３年ほど前に書かれたものであることをくれぐれも頭に入れてご笑覧いただければ幸甚である。

はじめに

藤沢嵐子が昨 2013 年夏、亡くなった。享年 88 歳。訃報記事が大手の新聞に、また追悼記事が日本タンゴアカデミーの機関誌を始めいくつかの専門誌や冊子に掲載され、偉大なタンゴ歌手を悼む言葉が綴られていて私も共感する内容だった。しかしそこには、旧満洲での体験、とりわけ大連でのことはまったくと言っていいほど触れられてはいなかった。

確かに、嵐子は大連のことを語ることはなかった。長年、嵐子のそばにいたギタリストの河内敏昭さんや、付き人のように付き添っていた河内夫人にも決して大連のことは話さなかったという。タンゴ解説者の故・蟹江丈夫氏もかつて私に、何度も嵐子に大連のことを聞こうとしたけど、「もう大連のことは思い出したくもない」と言って堅く口を閉ざしたという。蟹江は「それだけ大連のことは思い出すのも嫌だったんでしょうね」と私に語ったことがあった。

思い出したくもない大連での出来事。語ることを拒否した大連の体験。しかし、藤沢嵐子という人間だけではなく、タンゴ歌手・嵐子を語るには、大連での体験は欠かせないものだと私は思っている。「それはお前さんの思い込みだ」と囁かれるのを重々承知の上で、私はそのことについて書いてみよう。

故郷を離れるということは・・・

その前に、なぜそれほど私が嵐子の大連体験にこだわるのかを説明したい。それには、どうしても自分のささやかな体験を語らないと納得されないのではないかと思い、少々私

の体験話に付き合っていただきたい。

1968 年の夏から翌年の 4 月初めまで、私はヨーロッパに遊び、中東やアジアを回って帰国した。このささやかなヨーロッパ体験は私にとって、言葉の本当の意味で、日本やナショナリズム、アイデンティティについて語ること、考えることの出発点になった。例えば、国際主義ということも、観念のレベルでなく、本当に実感レベルで考える契機になったのである。

一番長く滞在したのがポーランドだった。と言っても半年ほどの滞在である。そのポーランドで 1968 年の夏、菊地昌典と話す機会があった。菊地は、学生時代から私が畏敬する歴史家だった。マルクス主義的な世界観を持ちながらも、当時のソ連体制に批判的視点を確固として持っていた。

重要な決定的な体験とは

ワルシャワでのその日、小さなホテルの食堂で昼食を取っていると、そこにポーランド人と話している菊地がいた。そのポーランド人が私を日本人と認め、菊地と話をすることになった。無聊をかこっていたのか菊地はその晩、私に部屋に来ないかと誘ってくれた。ちょうど「プラハの春」がソ連東欧軍に弾圧された直後、1968 年の夏のことである。

その時、今は亡き菊地がこんな話をした。

「その人の人生にとって重要な時期にその場所にいるかいないか、ということはその後の人生や思想的な営為にとって実に大きく、決定的な意味を持つ」。菊地はそう言いつつ、ある日本人のフランス文学者の話をした。この人も、もう故人になっている。仮にM氏としておこう。M氏の著作はその後私も読んでそれなりに共感することもあったが、菊池はその時、こう言った。

「Mは戦後すぐフランスに行き、ずっと長くパリに滞在した。しかし彼の書いたものを読んでも、然るべき日本の人たちは評価しませんよ。焦点がずれている。呆けている。なぜか。日本で何が起こっているのか、その何かを見ていない。その時、日本にいて体験していない。決定的な時にその場所にいないということは、とても大きいことなのだ。そういう意味で、来たるべき日本の 1970 年は、極めて重要である。その時点に日本にいるかいないかは重要な考え方の機軸になるだろう」と語った。

このような趣旨を述べて、「予想される 1970 年の安保闘争は、60 年安保闘争の縮小再生産か拡大再生産かに過ぎない。思想的な転換点にはならないだろうと思う」という私の考えに、菊地はM氏の例を挙げて反論したのである。

嵐子にとって大連とは

菊地にとってM氏は、世間的にはパリに滞在する著名なフランス文学者だろうが、思想的には語るべきほどの文学者でなかったのである。長く日本を不在にしている男が日本について語ったり書いたりしていても、いやフランスについて書いたとしても、菊地にすれ

ばそれがいかほどのものなのか？　という程度に過ぎないのである。

菊地の言葉をもっと敷衍して考えると、「その人にとって重要な時期と思われる時に、その場所にいるかどうかは、その後の思想や行動に決定的な意味を持つ」というふうに言えるのだった。

そういう意味で、藤沢嵐子にとって敗戦後の大連は、その後の彼女の人生や、タンゴ歌手にとって決定的な意味を持っている、と私は考えるのである。

アイデンティティーとは何か

当時ワルシャワから１時間ほどの距離にあるウッジ市に、私より一回りほど年長のスラブ考古学を学ぶ 30 代の研究者がいた。今の私なら、日本人でスラブ考古学を研究するなんて面白い人もいるものだと肯定的に捉えるだろう。

しかし、前述のナショナリズムやアイデンティティなどについて考えていると、なぜ日本人がスラブ考古学を学ぶのか、その内的必然性が私には皆目、理解できなくなったのである。日本人なら、その拠って来たる日本の歴史や民族性、民俗や習慣などの文化を研究することならわかる。日本人としてのアイデンティティを追求する意味で、しごく尤もなことだと思う。それがどうしてスラブ考古学なのか。

ポーランドを離れる直前にその人とそんな議論をした時、彼は「貴方はなぜそんなに日本にこだわるのか」と言われ、「貴方の論理を突き詰めると私の存在は否定される」と言われた。それで私はこの議論を止めた。

思想的にも閉ざされていると思えたポーランドを離れて、当時の西ベルリンに着き、『ベルリン・ドイツオペラ』でワグナーの楽劇を観たり、東ベルリン（まだ≪ベルリンの壁≫があった時代だ）に行き『ベルリナー・アンサンブル』でブレヒトの芝居などを見るにつけ、ますますそのような思い、即ち、自己の民族的な感性などを抜きに真に芸術的表現は難しい、という思いを強くしたのだった。

高校時代から俳優座で千田是也演出のブレヒト作品を見ていた私にとって『ベルリナー・アンサンブル』のブレヒト劇は衝撃だった。言葉がわからなくとも、その緊張感あふれる舞台は日本にはないものだった。

所詮、日本人がワグナーを歌ったり、ブレヒトの芝居をやってもたかがしれたもの、それは単なる物真似じゃないか。ヨーロッパ人のように歌うことも演じることもできないだろう。その核心に迫ることはできないのではないか、と思ったのである。

たった一度の嵐子と私の会話

そんな思いを懐いて帰国して２年後の 1971 年だったか、湯沢修一が主宰するタンゴ鑑賞会「すいよう会」に参加した。ある日、藤沢嵐子が出演し歌った。歌い終えた嵐子に会うべく勇気を出して控え室を訪れ、「タンゴを歌うということに疑問をもったことはないか」、といった前述のような思いを嵐子にぶつけた。

嵐子は私の言葉を聞き、こう答えた。「私も何度か悩み、聖書を読んだりしました」。その時嵐子は、まだキリスト教の洗礼を受けていなかったのではないかと思う。

そうか。アルゼンチン生まれのタンゴを歌うことに、日本人である嵐子は本当のところ、歌うことができるのか、ブエノスアイレスの人々の心情に添うことができるのか、嵐子は悩みに悩み、キリスト教の聖書を読んでいたのだと思った。単なる流行歌手のような歌い手ではなく、本物の歌手であるからこそ、彼女はタンゴの核心にどう自分が迫ることができるのかと悩んでいたのだとわかり、さすが嵐子、と思ったものだった。

周知のように、嵐子は上野にある東京音楽学校（現・東京藝術大学）を中退し、父が勤めていた会社がある「満洲」の瓦房店（がぼうてん）に、母と末の弟と一緒に渡った。

瓦房店（中国東北部、大連から北東 100km ほどのところ）に着いたのは昭和 20 年、1945 年の元旦だった。＜満州―ニラの匂い。母はすぐ父とけんかをはじめた。「どうして、こんな臭い、不潔なところへ連れてきたの！」＞。嵐子は続けてこう書いている。＜やがて戦争は終わり、日本は負け、瓦房店の工場は接収されて、父は仕事がなくなった。その時から家計は私がみなければならなかった。＞（『カンタンド　タンゴと嵐子と真平と』）

敗戦で一変した日本人の地位

1945 年 8 月 9 日のソ連参戦、続く日本の敗戦は、たちまち攻守ところを変えた。日本の傀儡国家『満洲国』は瞬時に崩壊した。威張り散らしていた日本人たちは狼狽した。中国人や朝鮮人を見下していた日本人は、自分たちが拠って立つ根拠を失った。天国が地獄に変わった。

それでも大連をはじめ、ハルピンや新京（長春）、奉天（瀋陽）などの大都会にいた日本人はまだよかったといえるだろう。ソ連との国境沿いに入っていた「満蒙開拓団」の人々の惨状はそれこそ「筆舌にし難い」ものだった。

日本の敗戦によって嵐子の父親は失職した。嵐子は家族を養うため、大連のダンスホールや音楽喫茶で歌い始めた。

「大連、思い出すのも嫌！」

大著『大連・空白の六百日』を書いた富永孝子は 1931 年 9 月生まれ。大連で敗戦を迎えたのは 13 歳、もうすぐ 14 歳になる頃だった。嵐子は 1925 年 7 月生まれ、ほぼ 6 歳ほど年下である。彼女はこの著作を書くために、当時大連にいた多くの人々を取材した。男たちの多くは取材に応じてくれたが、女性たちは取材を拒否する人が多かった。大連でのことは話すのも嫌だったのだ。富永に聞けば、その筆頭が藤沢嵐子だったと言う。

それでも電話口に出た嵐子は、富永孝子の母親がロシア料理が得意で、ロシア人将校たちが集うレストランで料理を教えたこともあると話すと、やっと口を開き話し出した。

「なんて名のダンスホールか忘れましたが、正午から四時まで歌えばよいというので引き受けました。ドレスもなく、大急ぎで母の着物をほどき、手縫いのブラウスで舞台に立

ちました。でも、あの時代って私、思い出すのも嫌ですねェ」(『大連・空白の六百日』)。

かつて旧満洲関係のシンポジュウムに参加した時、パネリストだった作家のなかにし礼（牡丹江出身）や毎日新聞記者だった故・岩見隆夫（大連出身）ら男たちは、嬉々として敗戦後の大陸での生活を語った。少年だった彼らは、家族のために街に出ていろんなものを売り、家計の足しに役立った。少年たちは生き生きとして動き回っていた。

しかし少女たちは違った。進駐してきたソ連兵は暴虐の限りを尽くした。日本人の家に押し入り、目ぼしいものを略奪する。女たちはソ連兵が来るとわかると、すぐに押入れに隠れたり屋根裏に潜んで彼らが出て行くのをじっと耳をすまして聞いていた。

ソ連兵に辱しめを受けた女性たちもいただろう。自分がそのように遭わなくとも、そんな光景を見せられたり、聞いたことがあるだろう。

富永孝子は私に言うのだった。「私より４つ５つ上の女性たち、お嬢さんで育った人たちは大変だったと思います」。前述のように富永は敗戦時、満１４歳になる少し前、まだ少女といえば少女である。しかし嵐子は２０歳、もう女である。

嵐子も怖い目にあったかもしれない。直接被害に遭わずとも、聞くに堪えないようなことをたくさん見聞きしたはずである。彼女が「もう大連のことは思い出すのも嫌だ」と言うのは痛いようにわかる。

タンゴは過去を背負っている

周知のようにタンゴの歌詞はほとんどがハッピーエンドで終わらない。その多くは愛する女に裏切られたり、悲惨な目にあったり、苦労した男の話が多い。まさに人生のドラマを詠っている。今や伝説的タンゴダンサーとも呼ばれるカルロス・ガビートは私に、「タンゴは人生を背負っている。追憶でできている」(『ダンスファン』2003 年１月号）と語ったが、まさにタンゴは「過去を背負っている」のだ。

年を重ねるごとに、嵐子のタンゴはますます、人々の胸に迫ってくるように聞こえる。まさに「人生を歌っている」と言っていいだろう。

河内敏昭に聞けば、嵐子は未練たらしいことは本当に言わなかったという。歌手を引退し、タンゴの世界から離れ、新潟県の長岡市に移り住んだが、タンゴ関係者に会おうとしなかった。例外的に会うことはあったようだが、これまで付き合っていた人たちとはきれいさっぱり交際を絶ったという。未練もなく実にさっぱりとした潔さだったようである。過去に執着しないさばさばした性格なども、何もかも一切捨てて中国大陸から帰国した引揚者たちに共通するように思えるのだ。そんなふうに考えるのは私の偏見だろうか。

二つの大地（日本と大連）に引き裂かれた嵐子

タンゴはイタリアやスペイン、東欧のユダヤの移民たちが創り上げた歌であり音楽である。嵐子も広い意味で、「満洲」に渡った「移民」の末裔とも言えるだろう。映画作家の羽田澄子や山田洋次らにとっては、旅順や大連が「故郷」と呼べるような位置を占めている。

しかし嵐子にとって大連は「故郷」とは呼べない。

どっちつかずの大連。思い出すのも嫌だという大陸での思い。過去を葬りたい、封印したいという思いは、芸術家であればこそ、精神分析的な意味でどこかで≪昇華≫しなければいけない。そうしなければどう生きていけばいいのだろうか。

嵐子の最初の著作である『タンゴの異邦人』を読むと、ロシタ・キロガに触れてこんな文章が出てくる。アルゼンチンでビクターレコードの支配人が招待してくれた別荘でのアサードの時である。

「私が前からぜひ会ってみたいと望んでいた、その昔の名歌手ロシタ・キロガを招待しておいてくれた。この時、キロガ女史は、自分でギターを弾いて歌ってくれた。けれど自分はもう歌には何の興味もない。タンゴ歌手であった過去を思い出したくもない、と言っていた」

まるで晩年の自分のことを語っているように思えないだろうか。

タンゴに過去の思いを込めた嵐子

嵐子はタンゴ歌手である。タンゴ歌手とはただ歌詞を唄うだけでない。感情を込めて歌わなければ聴く人を感動の渦に引き込むことはできないだろう。嵐子は日本のファンだけでなく、ブエノスアイレスの人々をも虜にしたという。それこそ決して語らなかった大連での人生、心の内に封印した思い、その痛いような想いをタンゴに昇華したと言えるのでないだろうか。

語りたくない大連、嫌な大陸での思い出。しかし、それに繋がる心の底に眠る無意識の思いまで封印することはできない。嵐子はその思いを封印できずにいた。心の奥底に眠る大連での諸々の思い、語りたくない過去、思い出したくもない心模様、しかしだからこそ、タンゴを歌う感情の中に、それを昇華し表現にまで高めることができたのではないか。嵐子のタンゴに我々が魅せられるのも、まさにここにある、と思うのである。

（文中、敬称略）

（おおるい・よしひろ：当会事務局長。著書『ある華僑の戦後日中関係史―日中交流のはざまに生きた韓慶愈』（明石書店）、論考に「水稲王 藤原長作物語―中国の大地に根づいた日中友好の絆」「国際主義を超えて HOMARANISMO を！―K・マルクスからL・ザメンホフの人類人主義へ―などがある）

≪日中国交正常化 45 周年企画≫

方正日本人公墓建立を許可した周恩来の足跡を訪ねて

今年は日中戦争の発端となった盧溝橋事件から 80 周年という年でもあります。日本の敗戦後、やっと日中間の国交が回復してから 45 年目という年、国交正常化を果たす上で重要な役割を果たし、また方正日本人公募建立を許可した国際的ヒューマニスト・周恩来総理の足跡を訪ねる旅を企画しました。ぜひご参加をお待ちしています。

日程　8 月 22 日（火）	羽田発(CA184)　8：30	
	北京着　11：20	
		午後　周恩来が在学中に五四運動の指導をした天津へ
		古文化街など見学
8 月 23 日（水）	天津	周恩来鄧穎超記念館、研究者の講話を予定
		周恩来の母校・南開大学　溥儀が暮した静園、周が国
		際的な視野を培ったイギリス租界の五大道を視察
8 月 24 日（木）		午前　アロー戦争や義和団事件ゆかりの望海楼教会
	天津発(8L-9648)　13：10	
	淮安着　14：35	
		午後　周恩来の出生地、淮安へ
		周恩来故居、周恩来紀念館、
		周恩来幼年期の読書旧跡
8 月 25 日（金）	淮安	午前　川町下、漕運広場内の総督署と水上輸送博物館
		午後　南京へ　周恩来が国民党政府と和平交渉を行う
		為に滞在した梅園新村紀念館
		辛亥革命後の中華民国臨時政府の中心・総統府
8 月 26 日（土）	南京	午前発～（高速鉄道）～紹興へ　午前着
		午後　父方の実家である周恩来祖居、
		魯迅故居、三味書屋、紹興酒工場
8 月 27 日（日）	紹興	午前　杭州の西湖を経て上海へ　その後空路帰国
	上海発(CA157)　17：20	
	成田着　20：40	

旅行代金　￥２２７,０００

募集人員　15 名～25 名を予定しています。（最小催行人員 15 名、添乗員 1 名同行）

旅行企画・実施　㈱富士国際旅行社（募集型企画旅行）　担当：堀米亘（ほりごめ）

申込み先　電話：03－3357－3377　ＦＡＸ：03－3357－3317

企画　方正友好交流の会　後援　一般社団法人日中科学技術文化センター

連絡は大類善啓まで。電話：03－3295－0411 または 090－2768－3338

方正（ほうまさ）日本人公墓が私たちに問いかけるもの

――「方正友好交流の会」へのお誘い――

1945 年の夏、ソ連参戦と続く日本の敗戦は、旧満洲の開拓団の人々を奈落の底に突き落としました。人々は難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々が方正の地で息絶えました。それから数年後、累々たる白骨の山を見た残留婦人がなんとかして埋葬したいという思いは、県政府から省政府を経て中央へ、そして周恩来総理のもとまでいき、中国政府よって「方正地区日本人公墓」が建立されました。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない 1963 年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれたのです。日本人開拓民たちのおよそ４５００人が祀られているこの公墓は、中国広しといえどもこの方正にあるものだけです。（黒龍江省麻山地区でソ連軍の攻撃に遭い、400 数十名が集団自決した麻山事件の被害者たちの公墓も 1984 年に建立され、この方正の地にあります）

この公墓の存在は、私たちの活動もあり徐々にではありますが、人々に知られるようになりました。民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって管理維持されている公墓の存在を、更に多くの人々に知ってもらおう。「愛国主義」ではなく、民衆レベルでの国際的な友愛精神を広めていこうと設立したのが「方正友好交流の会」です。当会の前身は１９９３年に設立され、２００５年６月に再発足し、日中友好の原点の地ともいうべき「方正」に光を当てたいと活動しております。

個人会員　一口　１,０００円　　団体・法人会員　一口　１０,０００円

（口数は最低一口、上限はありません）

方正友好交流の会

101－0052　東京都千代田区神田小川町３－６（社）日中科学技術文化センター内

電話　03ー3295ー0411　FAX 03―3295－0400　E-mail：ohrui@jcst.or.jp

郵便振替口座番号　00130―5―426643　加入者名　方正友好交流の会

HP アドレス：http:/www.houmasa.com/

≪報告≫　　ありがとうございました！

前号の会報 23 号入稿後、2016 年 12 月 8 日以降にカンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を以下に記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。（敬称略、受取った順に記載しました。2017 年 4 月 26 日現在）

武吉次朗　野沢太三　及川淳子　髙木昴　矢吹晋　榎戸吉定　小柴玲子　篠原淳子　小畑正子　高木凉子　篠田欽次　山内良子　小出公司　肥後茂樹　芳村晶好　宮田一郎　大島満吉　清水孝一　田中正昭　山口真　正田昌晴　奥田俊夫　大西広　藤原作弥　貞平浩　小倉光雄　岡百合子　塩野泰彦　石原健一　阿久津国秀　崎山ひろみ　小玉正憲　田澤仁　柳瀬恒範　神田さち子　高橋甫子　篠原国雄　芹澤昇雄　小野寺喜一郎　高田京子　田村正篤　山川梅子　吉川孝人　中村ふじゑ　松澤康雄　瀧亀久男　佐藤喜作　小島正憲　山田敬三　金倉美佐恵　田中佐二郎　窪田かづよ　成田晃一　吉岡孝行　石田武夫　鵜沢弘　小関光二　岩嵜弘三　岩間孝夫　鳥島せい子　石橋辰巳　末広一郎　佐藤千栄子　NPO 法人やまなみ　中島紀子　仰木忠幹　出口三平　亀山英雄　木戸冨美江　天竺桂尚穂　伊原忠　園木宏志　川合継美　毛利悦子　石田和久　杉田春恵　藤井盛　藁武多四郎　高橋守男　鈴木秀年　滝永登　望月迪洋　團野廣一　千田優子　長谷川順一　山下くに　林幸子　可児力一郎　渡辺一枝　黒岩満喜　由井格　平沢千恵子　村田吉隆　下山田誠子　水城可　深山信雄　落合智恵子　今村隆一　高橋健男　前田滋子　近藤耀子　清島一順　上条八郎　小林浄子　石橋実　望月信孝　依田高明　久保和男　長谷部郁子　照山真木子　涌井哲夫　鈴木敏夫（葛飾区）　内山則夫　富田宗廣　山下美子　広田彰夫　矢島敬二　土橋貞夫　宮腰直子　石塚さとし　名取敬和　酒井武史　立岩眞理子　寺本康俊　丹野雅子　横堀谿　木村護郎クリストフ　藤村光子　金丸千尋　島辰夫　林郁　新谷陽子　新田百合子　宮武正明　南雲英雄

・・

＜編集後記＞

前号は、両陛下が満蒙記念館を訪問されたことを大きく取り上げた故か反響はすこぶる多かった。安倍政権やそれを取り巻く日本会議などが戦前の戦争史観を肯定的に捉え、日本の過ちを正面から直視しない状況の中、「過去をしっかりと見据えなければいけない」という両陛下の思いと行動は、それ故にこそ、今後も大いにアピールしたいと思っている。

先日ある集会で、講演者が天皇退位の問題に触れて、「天皇制廃止という選択があるでしょ！」と話したところ、拍手する人たちがいて、性根がすわった気骨ある人たちがまだまだ健在なのだと思った。今日の右傾化状況を見るにつけ私たちが、昭和天皇やメディアの責任をも含めて、戦争責任をついぞ徹底的に追及してこなかったつけが今日来ているのだと思っている。多忙の中、寺沢さんに再び、両陛下に関して原稿を依頼したが、一言、このことをつけ加えておきたい。またこれからも、田平正子、千田優子氏らのような＜満蒙＞の枠にとらわれず、精神的に豊かな未来を志向できるような原稿を載せたいと思っている。会員、非会員を問わず、いろいろな方からの原稿を期待したい。（大類）

≪表紙写真撮影：寺沢秀文≫

『星火方正～燎原の火は方正から～』（第 24 号）2017 年 5 月 12 日発行
発行：方正友好交流の会　編集人：大類善啓　Email：ohrui@jcst.or.jp
〒101－0052　東京都千代田区神田小川町 3－6　日本分譲住宅会館 4 F
(社)日中科学技術文化センター内　電話：03－3295－0411　FAX：03－3295－0400
郵便振替口座番号　00130－5－426643　加入者名　方正友好交流の会